

64-257



1200501278128

64
257



始





水藤田
家舊藏書類

第



14-257

編輯例言

一、本書には後藤家所藏に係る藤田家舊藏書類中の齊昭親書の大部分と東湖書案の一部とを輯録し、齊昭親書の次に天保三年の親諭原案を掲げ、東湖手録三種を東湖書案の後に附刷せり。

一、齊昭親書一百十三通は(イ)建白書原案及び其斷片(ロ)第三者への書翰草案(ハ)他人の書に親く批削を加へたるもの并に(ニ)諸種の件案に對する其意中を内示せるもの等にして、東湖は之に基きて烈公の意見を修訂整備するを常とせり。但し齊昭親書中末尾の一通は會計方の書付にして烈公は單に二ヶ所二百七十四ページ第一行并に第八行の割注符箋して數語を注記したるに過ぎず又同ページ第九行目以下三行は戸田忠太夫の付注なり。

一、齊昭親書は元、東湖之を鄭重に保管し、一々紙を以て包装し、「御書」御筆、何月

例言



何日御下等の表記を施せり、今本文各項の初めに、「」の符號を付せるもの
乃ち是なり。

一、天保弘化以降齊昭を中心とし兩田^{藤田}等正義の士の間に秘用せられたる神發假名なるものあり。後藤家所藏烈公文書中長文の書翰にして首尾悉く此隱語を以て綴られたるもの拾數點あるも、今之を省きて收録せず、但し本書掲載文書中間々神發假名を交ふるものは其譯語を平假名を以て右傍に注し、其眞譯を欄外に掲記するに黽めたれど往々其意を解し能はざるものなきにあらず。

一、齊昭親論原案は烈公草案に東湖批削を加へたるもの、本書には原案と批削とを雙びに尊重して原體のまゝ之を印刷せり。乃ち本文中□の中に收めたる字句は烈公原文にして其傍に細註を施せるは、凡て東湖の添削にかゝる。又東湖は往々其意見評語を鼈頭に標記せるもの少からず、其語簡單なるものは、元の位置に之を頭書したれども、長文にして欄外に掲記

し難きものは各項の末尾に一字を下げて之を挿注せり、本書印刷の際誤つて一々「東湖注記」の傍注を施すことを逸せり、但し細心閲讀を賜らば其注記なるを識別すること難きにあらず。

一、東湖書案は其大部分(イ)烈公書翰の代作草案(ロ)烈公建白書の修訂原案(ハ)東湖上書並に(ニ)東湖書翰の草稿にして、間々他人の來書、返翰等を添付す。後藤家所藏東湖文書尙ほ百餘點あるも、多くは惚忙多事の際、走筆急書せる私案なればにや書體悔澁、判讀不可能、仍て止むなく此卷に合載することを割愛せり。

一、齊昭親書并に東湖書案は概ね之を年代順に序列せり、但し原書に年月を明記せざるものは編者の推定に依りて假りに年代を決定すと雖も元より誤謬なきを保せず、其推定に依るものは各項の初め紀年の頭目に(推)の符號を付す、又全然推定し得ざるもの、及び敢て年次を決定せざるも不可なしと認定したるものは年月不詳のまゝ得るに隨つて之を掲記せり、尙

親書并に書案の目次には一々其内容の要項を掲げたるも、それは單に本書
索出の一助たるに過ぎず、當該文書の書意の全貌に至つては本文に就て
之を検討するを要す。

昭和九年六月

日本史籍協會

水戸藤田家舊藏書類 第三

目次

第一	德川齊昭親書(案)	自天保三年至安政二年	一頁
一	德川齊昭書付	「金加役宛」彫工龜吉の技を賞す(推)天保三年十二月十四日	一頁
二	德川齊昭書付	常平倉の整備の要を(推)天保三年十二月廿七日 説き製砲進抄を喜ぶ(推)	二
三	德川齊昭書付	重臣土著海岸防衛の議	四
四	德川齊昭書付	「下總一月寺住僧宛」海内風説密報を 依頼する書案	天保五年二月十五日九
五	德川齊昭書付	藤田貞正の議を駁す	天保五年十二月
六	德川齊昭書付	「天久保忠真宛」神武陵修覆に關する建議草案(一)	天保五年一三
七	德川齊昭書付	神武陵修覆に關する建議草案(二)	天保五年
八	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」仙石騷動忠臣友(推)天保六年八月八日 「鷺神谷轉」の件	二三

九	德川齊昭書付	北地移封内願の件	天保九年閏四月十五日	二五
一〇	德川齊昭書付	「孫一」郎宛 手元金仕法覺書	天保九年六月二日	二六
一一	德川齊昭書付	「金加役宛」甲冑武器購入資金融通の事	天保十年三月十九日	三二
一二	德川齊昭書付	「金加役宛」製茶に就て	天保十一年四月廿三日	三四
一三	德川齊昭書付	「金加役宛」積立金手元金扱 振に就ての意見	天保十一年十月十一日	三六
一四	德川齊昭書付	「水野忠邦宛」水越の施政を賛美す	天保十一年	三九
一五	德川齊昭書付	「家老宛」廉中就國出願の件	天保十二年八月廿二日	四一
一六	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」有栖川精宮將軍養女の件	天保十三年十一月四五	四五
一七	德川齊昭書付	「水野忠邦宛」打拂令停止及對外意見	天保十三年	四八
一八	德川齊昭書付	「金加役宛」筒材採掘の事	天保十四年二月	五六
一九	德川齊昭書付	「水野忠邦宛」大船製造解禁の事	天保十四年閏九月九日	五七
二〇	德川齊昭書付	問部侯に關する巷説	天保十四年閏九月	六一
二一	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」罪人取扱と人命尊重建議案	推天保年間	六三

二二	德川齊昭書付	對外防衛確立建議案	推天保年間	六五
二三	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」北地下附願の件 興津所左衛門上申添付	推天保年間	六八
二四	德川齊昭書付	「水野忠邦宛」北地移封希望 部津輕諸氏取扱振	推天保年間	七三
二五	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」北地所望建議の件	推天保年間	七六
二六	德川齊昭書付	「安食七兵衛等宛」鑄砲所燒失跡始末の指令	推天保年間	八一
二七	德川齊昭書付	「安食七兵衛宛」洋藥の効能と汚染の脱落	推天保年間	八三
二八	德川齊昭書付	増封運動と北地移封の議	推天保年間	八五
二九	德川齊昭書付	松前移封と助勢金打切の件	推天保年間	八六
三〇	德川齊昭書付	歴代夫人院號廢止の議	推天保年間	八七
三一	德川齊昭書付	外人排除邪宗嚴禁	推天保年間	九〇
三二	德川齊昭書付	「戸田銀次郎宛」魯人蝦夷來航漂民陸揚の事	推天保年間	九一
三三	德川齊昭書付	「藤田東湖宛」丙丁龜鑑と作刀献上に就て	推天保年間	九四
三四	德川齊昭書付	「老中宛」謹慎後の三家の立 場を開陳するもの	弘化元年五月五日	九七

三五 德川齊昭書付 「海野泉藏等宛」 英艦來航風説 弘化元年七月十二日 一〇一
 三六 德川齊昭書付 「金加役宛」 兜製作につき直右 衛門等賞揚の事 弘化元年九月朔日 一〇三
 三七 德川齊昭書付 八郎鷹九郎鷹に陣羽織給與の件(推)弘化元年 一〇七
 三八 德川齊昭書付 硫黄買入の件 弘化二年八月廿六日 一〇八
 三九 德川齊昭書付 硫黄硝石貯藏の秘策 弘化二年九月二日 一〇九
 四〇 德川齊昭書付 琉球處置に付齊彬 歸國時の幕令評語 弘化四年四月廿九日 一一一
 四一 德川齊昭書付 武家法度改訂案及び僧徒自滅策 嘉永二年五月廿四日 一一三
 四二 德川齊昭書付 常平倉貯穀處分に就き 嘉永五年六月二日 一一七
 四三 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」 觀雪歌句應酬並に 東湖家族贈品の件 嘉永六年二月二日 一二四
 四四 德川齊昭書付 天狗黨振及び文通多端のこと 嘉永六年五月六日 一二五
 四五 德川齊昭書付 和蘭風説書書拔 嘉永六年七月廿七日 一二七
 四六 德川齊昭書付 親書開封を難す 嘉永六年八月十五日 一三五
 四七 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」 幕府有司動向心得等の件 嘉永六年八月カ 一三六

四八 德川齊昭書付 米國使節への返輪振に就て 嘉永六年九月十三日 一三七
 四九 德川齊昭書付 「兩田宛」 中濱萬次郎接見の件 嘉永六年九月十八日 一三九
 五〇 德川齊昭書付 「兩田宛」 魯國々書の内容を概示す 嘉永六年九月廿三日 一四一
 五一 德川齊昭書付 魯國への返輪に就ての意見 嘉永六年十月二十日 一四三
 五二 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」 洋語戎服禁止(推) 嘉永六年十月廿六日 一四四
 五三 德川齊昭書付 蝦夷に關する藩記借入(推) 嘉永六年十月カ 一四七
 五四 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」 尾州奸人并に露國 嘉永六年十二月二十日 一四九
 五五 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」 大砲獻上と福地 嘉永六年十二月以後 一五一
 五六 德川齊昭書付 「兩田宛」 露使應接風評等のこと 嘉永六年十二月廿六日 一五二
 五七 德川齊昭書付 米國使節への贈品 嘉永六年 一五四
 五八 德川齊昭書付 川路聖謨長崎出張の件(推) 嘉永六年 一五七
 五九 德川齊昭書付 海防懸辭退内願書案 嘉永六年 一五九
 六〇 德川齊昭書付 佛教排斥論 嘉永年間 一五九

六一 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」魯英佛不和に處する態度に就て(推)嘉永年間 一六三

六二 德川齊昭書付 「阿部正弘宛」米使への返翰振に就て 安政元年正月十八日 一六四

六三 德川齊昭書付 異船入港と警報の手段に就て 安政元年正月廿一日 一六六

六四 德川齊昭書付 「阿部正弘宛」浦賀附近海陸防禦案 安政元年正月廿四日 一六八

六五 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」米國使節への贈品を憤慨す 安政元年正月一七〇

六六 德川齊昭書付 林大學頭等届書 安政元年二月三日 一七三

六七 德川齊昭書付 「兩田宛」米使應接に就ての内議(推) 安政元年二月七日 一七六

六八 德川齊昭書付 「兩田宛」米人横濱埋葬の件に付 安政元年二月十一日 一七八

六九 德川齊昭書付 「兩田宛」米使再來後折衝の内情密報(推) 安政元年二月 一八〇

七〇 德川齊昭書付 米艦測量、下田條約、海防武備等意見 安政元年四月 一八二

七一 德川齊昭書付 非常改革上申案 安政元年四月 一八四

七二 德川齊昭書付 外藩人の石川島造(推) 安政元年五月廿一日 一八七

七三 德川齊昭書付 「松平河内守宛」兜贈進の書翰案 安政元年六月朔日 一八九

七四 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」步役轉遷に就て 安政元年六月 一九〇

七五 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」橋本卿へ短刀進上の件 安政元年夏 一九一

七六 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」殿中并に一橋川路(推) 安政元年 一九二

七七 德川齊昭書付 「老中宛」幕政參與辭退の内意書案(推) 安政元年秋 一九四

七八 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」石見守子息教養の件(推) 安政元年カ 一九五

七九 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」米使献上の望遠鏡所望の件(推) 安政元年 一九八

八〇 德川齊昭書付 「久世閣老宛」三港開放と士氣の興廢に就て(推) 安政元年 二〇〇

八一 德川齊昭書付 「兩田宛」國境協定に關する魯使への回答案(推) 安政元年 二〇二

八二 德川齊昭書付 「兩田宛」魯艦來航と京都警備の件(推) 安政元年 二〇三

八三 德川齊昭書付 慶篤の兩田面會希望に付其心得 付笑話(推) 安政元年カ 二〇五

八四 德川齊昭書付 關白へ豹皮進上の件 安政元年カ 二〇六

八五 德川齊昭書付 蘭國へ船舶注文の書案(推) 安政初年 二〇八

八六 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」梵鐘鑄潰令の件(推) 安政二年三月 二〇九

八七 德川齊昭書付 英米船下田長崎來航の件(推)安政元年閏七月廿六日 二一〇

八八 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」魯使下田應接及び梵鐘鑄潰の件安政二年 二一二

八九 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」米使献上の元込銃々銘撰定の件安政二年 二一四

九〇 德川齊昭書付 琵琶献上に付關白への書翰案(推)安政二年カ 二一五

九一 德川齊昭書付 旭日丸船卸し仕事師の件 安政二年 二一六

九二 德川齊昭書付 建議案の一節(一) 二一七

九三 德川齊昭書付 建議案の一節(二) 二二〇

九四 德川齊昭書付 建議案の一節(三) 二二一

九五 德川齊昭書付 三家附家老處置の件(一) 二二二

九六 德川齊昭書付 三家附家老處置の件(二) 二二六

九七 德川齊昭書付 三家附家老處置の件(三) 二二七

九八 德川齊昭書付 「藤田東湖宛」妻子就國に關する意見 二二八

九九 德川齊昭書付 奥向肅正井に其内情等の件(一) 二三一

一〇〇 德川齊昭書付 奥向肅正井に其内情等の件(二) 二三一

一〇一 德川齊昭書付 奥向肅正井に其内情等の件(三) 二三九

一〇二 德川齊昭書付 嫡庶、長幼、繼嗣、子女縁組并に奥向取締等に關する意見(一) 二四一

一〇三 德川齊昭書付 嫡庶、長幼、繼嗣、子女縁組并に奥向取締等に關する意見(二) 二四三

一〇四 德川齊昭書付 嫡庶、長幼、繼嗣、子女縁組并に奥向取締等に關する意見(三) 二四九

一〇五 德川齊昭書付 嫡庶、長幼、繼嗣、子女縁組并に奥向取締等に關する意見(四) 二五四

一〇六 德川齊昭書付 學校祭神の議 二五六

一〇七 德川齊昭書付 要石の歌 二五七

一〇八 德川齊昭書付 文武獎勵の方策 二五七

一〇九 德川齊昭書付 額字に關する心得 二六〇

一一〇 德川齊昭書付 「佐野勘兵衛宛」船中飯たき器考案 二六一

一一一 德川齊昭書付 「金加役宛」製茶並に養蜂の心得 二六五

一二二 德川齊昭書付 「安食七兵衛宛」豊凶の處置とその心得 二六七

目次

一一三 德川齊昭書付 金穀收納覺 二六九

第二天保三年齊昭親諭原案 東湖批削 二七九

第三 藤田東湖書案

一 藤田東湖書案 烈公襲封に際し中興一新建議書案(推)文政十二年カ 三一九

二 藤田東湖書案 府民調節奢侈制禁に關する老中への烈公書案 天保五年六月六日 三二三

三 藤田東湖書案 同前に付再度書翰案 天保五年六月廿四日 三二八

四 藤田東湖書案 深澤甚五兵衛推獎と士風刷振上申案 天保十四年十二月六日 三三二

五 藤田東湖書案 南北兩策に關し老中大久保忠真への烈公内願書案 天保年間 三三七

六 藤田東湖書案 北地拜領後出人員原案 天保年間 三四九

七 藤田東湖書案 佐藤捨藏招聘一件其他學館問題(推)弘化三年カ 三五七

八 藤田東湖書案 正奸兩黨處置の件 戸田忠太夫返書添付 嘉永二年三月七日 三六二

九 藤田東湖書案 家臣川又才助解雇願末 嘉永四年七月十六日 三六六

一〇 藤田東湖書案 密儀上申書草案 嘉永四年八月 三六九

一一 藤田東湖書案 密書草案 嘉永四年九月七日 三七五

一二 藤田東湖書案 某に代て御馬方不正訴訟上申案 嘉永四年 三七七

一三 藤田東湖書案 諸吏交迭見込と正奸人物評 嘉永四年(或ハ五年カ) 三八四

一四 藤田東湖書案 父子離間の奸策の事を老中に謀る烈公書翰草案 嘉永五年二月廿七日 三八七

一五 藤田東湖書案 所懐を吐露して某に示す書案(推)嘉永五年 三八九

一六 藤田東湖書案 牧野閣老への烈公書簡案 嘉永六年閏七月 三九四

一七 藤田東湖書案 大號令正文案に就き 嘉永六年八月十二日 三九七

一八 藤田東湖書案 烈公批正文見書案 附日魯應接の件 嘉永六年十一月四日 三九九

一九 藤田東湖書案 魯使への返翰に就き烈公意見書案(推)嘉永六年カ 四〇〇

二〇 藤田東湖書案 大號令に就き老中への建議案 嘉永六年暮 四〇一

二一 藤田東湖書案 浪人取立其他急務條々建議草案 嘉永六年 四〇六

二二	藤田東湖書案	蘭使を通じ米使への答辨書案	嘉永六年	四〇九
二三	藤田東湖書案	米使渡來守備必戰大號令案		四一一
二四	藤田東湖書案	魯人へ返翰に就ての書意見案附烈公朱批	嘉永六年十月廿七日	四一二
二五	藤田東湖書案	安井仲平献品上申書案	安政元年正月十日	四一五
二六	藤田東湖書案	浦賀警備市中心得等老中への烈公書翰案	安政元年正月十六日	四一六
二七	藤田東湖書案	非常警報方策につき老中への烈公書案	安政元年正月十七日	四一七
二八	藤田東湖書案	米使應接等に就き老中への烈公書案	安政元年正月十九日	四二〇
二九	藤田東湖書案	米使應接振に付老中への烈公書案	安政元年正月廿三日	四二三
三〇	藤田東湖書案	ペリー應接に付上申書案	安政元年正月廿七日	四二五
三一	藤田東湖書案	非常覺悟に付老中への烈公書案	安政元年正月廿九日	四二七
三二	藤田東湖書案	中濱萬二郎の儀に付(推)安政元年二月二日江川への烈公書案		四三一
三三	藤田東湖書案	出貿易并に大艦建造急務建議案	安政元年二月二日	四三三
三四	藤田東湖書案	阿部伊勢守の老中留職を喜ぶ烈公書案	安政元年四月十四日	四三四

三五	藤田東湖書案	琉球并に樺太取扱に就き老中への烈公書案	安政元年五月十九日	四三六
三六	藤田東湖書案	魯艦遭難處置振に付上申書案	安政元年十一月十日	四三九
三七	藤田東湖書案	外艦水戸領海來航届書案	安政二年四月十六日	四四〇
三八	藤田東湖書案	外艦海岸來航の際の心得達案	安政二年	四四一
三九	藤田東湖書案	日本總船印日章旗制定建議案(其一)	安政年間	四四三
四〇	藤田東湖書案	日本總船印日章旗制定建議案(其二)	安政年間	四四三
四一	藤田東湖書案	鐵砲製造に付拜借金願書案	安政年間	四四五
四二	藤田東湖書案	艦船雛形製造に付老中への烈公書案	安政年間	四四六
四三	藤田東湖書案	海防手當に付領民への達書案	安政年間	四五〇
四四	藤田東湖書案	江戸出府に付在府中の父に贈る書	幼年時代	四五二
四五	藤田東湖書案	蘭語名辭邦譯に付江川への烈公書案		四五五
四六	藤田東湖書案	神崎梅林仕立建議案		四五六
四七	藤田東湖書案	岡部忠藏彈劾建言案		四五七

四八	藤田東湖書案	尾州繼嗣に付紀公への烈公書案	四六〇
四九	藤田東湖書案	武家の虚名并に郷士劔槍上覽上申案	四六三
五〇	藤田東湖書案	婦女子虚飾制限に付上申書案	四六四
五一	藤田東湖書案	天覽台覽詩歌寄合書に付上申案	四六六
五二	藤田東湖書案	郡方手代増祿歎願書案	四七〇
五三	藤田東湖書案	連離除奸に付上申書案一片	四七一
五四	藤田東湖書案	諫諍書草案	四七二
五五	藤田東湖書案	本役副役并見習進止に付上申案	四七五
五六	藤田東湖書案	密事書翰案(宛名不詳)	四七七
五七	藤田東湖書案	君道に付上申書案筋書	四七九
五八	藤田東湖書案	學風振作小宮山青山等登用上申案	四八一
五九	藤田東湖書案	寺社改革と人材進止意見書案	四八五
六〇	藤田東湖書案	罪臣黜罰書案	四八七

第四 藤田東湖手録

一	外岡一件風聞	壬辰(天保三年)九月永井政介所聞	四八九
二	弘化三年手録	附老中奉書並烈公答書	四九八
三	東藩天保月表		五一四

德川齊昭親書

目次

十六

水戸藤田家舊藏書類 第三



德川齊昭親書

一 德川齊昭書付〔金加役宛〕（推）天保三年十二月十四日

書附之品

水戸

金加役へ

嚴寒之節無障雀躍いたし候扱は先便又ハ龜吉等細工令一覽候何レも絶妙殊ニ龜吉ハ當年十八のよし別て末頼母敷信家義通高義の三作ニも往々ハ劣り申間敷兩人とも手際感心なる事ニて國の寶ニ可相成人物尙又佩立等いたし候者も是亦よき人際ニ被存候右龜吉又ハ兩人へ實名遣し候故遣し可申候國井事も是迄の實名よりは義之字を用さセ度存候故是亦遣し候故

德川齊昭親書（天保三年十二月）

一

何レも以來遣し候實名ニ改メ彫セ可申候武士ハ義勇第一ニテ殊ニハ良工に義通と申も有之候へはかた／＼義の一字を取候て實名遣し候何もへ内々遣し可申候之

辰十二月十四日

水府
金加役共へ

二 徳川齊昭書付(推)天保三年十二月二十七日

辰十二月廿七日着御下

御筆

年内も余日なく候處如何ニも不順之氣候未雪も一度も無之丙丁の年も目前ニ來り申候へは甚苦心いたし候常平倉の方遊金も有之候ハ、何レニテか下直の穀只今の内買入可然候白井此地ニ居候内是へも咄置候へハ何とか申聞も有之候半何レ人々凶荒へ心附不申内手早く買入申度候來春ニ相

成大雪ふり余寒強く有之候ハ、來年作物宜敷歟も不相分候へ共只今の處ニテハ何分心配いたし候依申聞候之

十二月廿四日

尙々何レも精勤大悅いたし候瓦屋甲冑も皆々世話故何レも上達雀躍いたし候此上追々職人もふえ申候ハ、何よりの國産ニ可相成と存候追々門人等ふえ候やう尙世話いたし可申候市平泉藏等每度不變達者の義感心ニ候最早神崎の鐵炮も取かゝり申候半早春よりハ何分鐵炮共一精出し候やう市平も可申談候他所人ハ最初入不申筈ニ候へ共善四郎門人杯申て内々入候ニこまり申候以來ハ他所物一切入不申やう六衛門等へも可申聞候扱又新吉細工の義も早春よりは取かけ候て皆出來ニ相成候様加役の方ニテ扱可申候何も便ニ任セ此たん申聞候我等も最初には福島島の御見合ニテ御調ニも相成候よし讒訴と申も危キ者ニ候實ニ出家ハ我國の國賊大敵ニ有之國の米を食し候者ハ友ニ天をいたたき可申者に

無之候此度

御宮國賊も奇を生し候よし神慮ニ應候哉如何火中く

書附
之品

泉 藏
七 兵 衛

三 徳川齊昭書付二通 天保四年夏

「癸巳夏親批

二通

「^{原本}此の書ハ杉山へ御下ケなるへし寫ハ杉山の筆ナリ」

第一

一極内々承り申候仙臺杯ハ我等と違ひ大國の事ニ候へハ大名の大臣も多
且又土着者多候故普代の家來多持候者も多有之處此家杯ハ初より土着
の制ニ無之故普代の家來持候者も少く仙臺のうはさ杯承り候てハ浦山
敷存候へ共急ニ土着ニいたし候も我等か如きの微力ニハ難き事故同

心杯より追々土着ニこゝろみ可申哉と調候義ニ有之候是ハ我等申通り
ニ可相成と存候

一當節非常と申の急務ハ指當り海防と存候處北海の近邊ニハ幸備渡有之
處東海の近邊ニハ指引位の事ニ亦夫も其地ニハ居り不申全く公邊へ申
譯の一通りにて實用ニハ不相成候右故先年より朝暮考へ候ニ外ニ工風
も無之候處主水正事万石以上ニも候へハ港御領地を遣し知行所も右近
邊にて一まとめニつかハし船手頭より水主等ニ至候迄の惣奉行ニ申付
家來も追々土着ニいたし候様ニと申付猶亦へこの木の荒地も遣し土着
の家來を多持候様ニ申付候ハ、一方の防ハ出來可申や大筒等も是迄港
ニ指置候分皆主水へあつけ候て可然と存候且又先達御城ニても主水
正在所を承申處答ニ指支赤面致候事ニ付万石以上の者にて在所の無之
人と申ハ何レニも無之事ニ付是迄の一万石を取上港にて一万石遣候ハ
損ニも徳ニも不相成主水事も所々ニ分レ有之候よりハ一まとめニ有之

候へハ扱ニも宜右様成候ハ、追々勝手も相直り一ケ度の用ニ立可申候
と存候且又兵庫事ハ學力も有之勇氣も有之候へハ右様相成候ハ、定て
よきし工風も可致と存候處世上ニ而ハ我等か事をとかくに無願望の人
をひいきいたし候様ニ申候故右様いたし候以如何人申候ハ、此所も心
配且又主水正娘事小上臈ニて上り居候故右様の縁にていたし候ハ、人
々ニ被申候ては残念ニ有之所又左様なる小キ所迄氣を廻し見候ては何
事も手も足も出す事は不相成やうニ有之候依て前文ニ通りいたし候ハ
、政體に於て先如何ニ可有之哉此所承り申候扱又港殿の義遣候はおし
き所なりと申者も可有之候へ共右ハ全く遊場所ニ而候へハ遣候ても不
苦遣候ても參られ不申事も無之候右の近邊ニては堅固ニて一寸屋敷か
まえに出來候處ハ港御領地より外ニハ見え不申候主水土着ニ相成候ハ
、跡ハ追々鈴木等より土着ニいたし度事ニ候右ハ可承品ニハ無之候へ
共右様相成候ハ、世間の取沙汰と政體の得失如何と存付候故極内々承

り申候故無伏藏可申開候ニ早々火中ノ

第二

主水義ニ付太田御領地ハ城圍にも有之出來易き事ニ候へハ初ハ太田と
存付候所佐竹も水戸の城取候て當主を水戸ニ指置隠居ニて太田ニ居又
西山君ニも西山ニ御隠居遊ハし候ハ只遇然の事ニハ有之間敷と推察い
たし候へハ右の地ハ便利宜所ニて且又名山大川の氣味ニも可有之かさ
てハ外ニ出來易き所ハ先ツ港と考候故港と申候所水門ニてハ臺下ハ被
遣間敷上を遣候てハ人ハ臺の下ニ居土地は臺の上に在り扱も不宜且又
主水ハ何レも存候通の人物ニ候へハ何レの地を遣候ても不苦候へとも
子孫に至り候てハ如何の悪敷人可有之かも難計左様の時ニ右の地ニ居
候ハ、自ら不宜義モ出來可申哉何レ磯の邊と存候磯ニ候へハ船の便利
も宜しく又城より不遠候故城ニ非常の義有之候時の爲にも宜様存候右
様の義ハ先取のけ是非とも此一條ヲ此度下りの土産ニ出來申度存候へ

共一口申出候へハ彼方にて目を驚し正杯も姑息ニ染たかり勘杯も入用を先にし中／＼一人土着ニ致候も急ニハ決不申残念の義ニ候扱圖面ハ返し候故全く千太郎の心付にて組立いたし候つもりにて山口とか又ハ多田とか又ハ白石とかへ持参り上にてハ勿論政府ニても何と存候かも難計候へ共度々有志の者申候をも承り候上にて先年ヨリ工風いたし置候故御取用ニハ相成間敷候へハ全く各方迄御目せ申候と申様ニ申添爲見候ハ、可然と存候我等か味方甚た乏く候故一人も此儀申者多致度事ニ候持前ニ無之儀我等より千太郎へかけ候儀ハ無之事又千太郎より可申事ニも無之候へハ我等カ了簡ヲハ千太郎ハ不存ふり千太郎カ了簡ハ毛頭も我等存不申ふりニいたし不申候てハ却て模通り不宜候故右のつもりにて扱可申候前文ニも申候通先年より有志の者の申を承り右ニ千太郎工風いたし置候處御下リニも相成候へハ若御取用ニも可相成哉と申趣にて出し度事ニ候依圖面并趣意書返し申候

一 小山の義ニ付此間書扱見候ハ右ニハ内々の子有之候か否の義不相分候故若何レニ有之事かと存其つもりにて爲見候處其義一口書添へ不申候故分り兼候義と存候實ニ早々火中／＼

四 徳川齊昭書付下總一月寺住僧宛 天保五年二月十五日

原朱
甲午

原朱
一月寺ニ賜書案

御親書

原朱
御誓約

極内々申聞候

先年ハ懇慮ニ致し非常の節ハ味方をも不致筈の約定ニ有之候處久しく住寺打絶久々にて其方此度住職ニ相立大悦致候然ル處久々住職打絶候義故先年の約定も忘却可致も難計候故右の段申聞候猶又此家の善悪ハ勿論公邊を初メ諸家の風聞竝ニ事カハリ候義こもそう共より承り候義ハ極内々封書ニ致し江水寺社奉行竝寺社役の内より手本へ指出し可申候尤此家

より風聞爲承候と申義ハこもそう等ハ不申聞全ク住職の者の心得ニて承り候振ニ扱可申候也

午年

二月十五日

齊昭花押

一月寺、坊

名ハ善衛門へ承り可申候

二白此硯ハ先年より懇意ニ致候印迄ニ贈申候也

右ハ歸の上一月ヲ村セ承認遣し候故右の吟味ニて安介可致候尤一月の答も直筆ニて認サセ取置候心得也

五 徳川齊昭書付(推)天保五年十二月

御書 藤田貞正學校之議

御駁シ

藤田之説更ニ取ニ不足第一舜水雛形いたし候通りニ不相成儀ハ公邊ニて聖堂御建の節御入用莫大ニて其上行々御手入等不届故本堂計出来候處一昨年ハ右聖堂一覽致候處本堂計ニても一万五六千も掛り可申と存候へハ公義御普ニてハ二万余ニも可相成候逆も出来不申義其上出来候ても行先手入不届ハ眼前な

一舜水ニ被仰付雛形御出来ニ相成候義ハ日本ニて聖堂と申を能々存候人無之故御拵させ被遊候義と存候必スシも御建被遊へきことニハ有之間敷候

一空飾を相止實用を本とし云々尤ニて至極の宜しく候へ共雛形の通り出来候とて又左なきとて精を出し候者ハ同様と存候へハ右の雛形通りニ出来候様抔申はやはり空飾ニ有之候

一一万石も學校料ニいたし云々夫ニも不及事の様存候なくて不相成書は師範の者より申出其節買上候も可然又ハ師範の者へ問人よりハ是迄の

通り少々ハ贈物致候事と存候へハ少分の書ハ右ヲ貯置候て買上候様ニも可相成すべて指南等ハ是迄の通りニて只何藝も一流ツ、ハ一所へ纏メ置候て申さハ朝より夕迄家中の部屋住の者の遊處と相定メ候へハ外々へ出惡遊ひ出來不申右くるハの内ニさへ置候へハ學問とか武藝とか人々の好候品致候て有益に相成候のに無之てハ模通り不申候是ニてこそ實用を本ニ致候と申者ニ候

一 三味堂ニてさへ御手人有之只今ニてハ御益のミニ候へハ云々右の通りニて鷹峙か雪隠位の三味堂ニてさへ手入は不盡有之様ニ候へは舜水出來の雛形の通り出來候ハ、其節ハ盛んの様にても万一衰微致候節ハ手入不届却て手輕ニ候ハ、何レとか手入も可届ニらちなく大そうニ初出來候故今ハ不據こハし候外無之と申勢ニ相成候ハ一寸羅漢堂ニても知れたる者ニ候扱又聖堂に候へハ右とハ相違ニ候へとも申さハ孔子の堂ハ無くて指支と申ニハ無之諸士學文武藝等致サセ候爲ニ候處城内ニ

てさへ手入不行届位ニ候へハ只今初て出來候節ハ勢ニて出來候へとも行々の處迄行届可申とハ我等ハ不被存候いかにも手輕ニいたし候て模通り宜敷諸士の子弟引立候様ニのみと存候其上雛形の美々敷出來候ても狭キよりハ雜木ニて出來候ても廣キ方問人多く入込候ニは宜敷様存候然レハ藤田の説ハ一として取ニ不足被存候故右の段無伏藏申聞候

家老 共へ

一 水府家老等よりの書面爲見候故猶又三國半介等の了簡とも認爲見可申候
一 藤田の一説并愚意相添爲見申候
右件々見畢候ハ、返可申候

六 徳川齊昭書付「大久保忠真宛」

天保五年

、、、、、云々をもく

御當家ニて

天朝を御尊ひ被遊候義ハ三分天下有其二以服一事般と申處ニハ無之日本國中誰有て 將軍家の御下知をうけ不申人ハ一人も無之候處天朝を御尊敬被遊候義ハ鎌倉室町の如ニ無之こそ御至徳四方ニ行渡り海外の國々ニても日本を指て君子國とあふき候事ニて御武運長久の御義難有といふもおろかなれさて此國ニ生れてハ神國の爲を存候ハ誰も左様可有之義勿論ニ候へ共異端邪説の爲ニ蔽ハれ中ニハ神道といふハ説詞を讀計の様ニ存候者も不少よりして異端邪説の方へのミ□候者有之ハ何とも歎敷事ニ候拙者義ハ幼年よりいさゝか神國の道を好ミ候處神武天皇ハ人皇第一の 大祖ニましゝ 公邊ニても御尊敬被遊候義勿論と奉存候處 陵の義ハ少々小高ク有之のミニて中々 大祖の陵とハミえ不申よし承り幼年の節なからもあまりと存 陵御手入有之様致度心願ニハ有之候へ共部屋住の内とハ申込も可申出願も無之又申出候込も不叶義申出候ハ盲目同様故度々息休のミニて居候處不計も三蕃の被 仰付候

へハ其砌より内心ニハ如何様にかいたし候ハ、出来不申事も有之間敷と存候へ共色々の 公邊向の勤を初家政のいとま無之且又右様の義何方へ申入候て宜敷も不相分候故可應人と見當りこと時の機會を待居候處如何なる縁ニて歎しかも大政の司の足下と熱懇意ニ相成候義ハ實ニ今こそ可應人を得たりと相心得雀躍不過之候扱又感應寺御建立之儀杯ハ 西丸様御厄年故ニも可有之哉又は御武運御長久の御祈願も可有之哉と推察いたし候處其上ニも帝室始祖の廟御脩被遊候ハ、無此上御義是亦時の機會と存申出候へ共只今迄御脩無之義故 公邊ニて被遊候てハ御故障も可有之哉御故障の義も有之候ハ、内々ハ承知いたし度候感應寺御建立も定て御故障無ニしもあらざる様被存候へハ御故障の品ニよりてハ御出来ニ不相成義も有之間敷被存候 何も日光杯の様の義とハ違ひ御脩被遊候とて格別の御入用ハかり申間敷別紙拙圖位ニても可然哉と奉存候夫とも 公邊ニてハ御故障も

御座候ハ、拙者より 公邊へ願候ては相成間敷哉但し公邊へ願候ハ、定て二
應ハ京都へ御聞合被遊候上ニ
と奉存候義 又さらニ 公邊にてハ御存不被遊振の方か宜敷候故拙者心付ニ
て關白へ申入

禁裏仙洞の 叡慮ニ可至候て夫次第にて出来候ても宜敷と有之候へハ其
通リニ扱可申候此度 西丸様御厄年ニ付て相願候ハ、鹿島靜吉田等の御
札指上候類ニ候へハ御聞濟も可有之哉と存候

大祖の御廟如右ニ相成其ま、打捨居右三社の御祈禱相當不致候へハ

大祖御廟御脩ニ相成候ハ、此上 將軍家御武運長久の御爲と奉存候格別
入用かゝり候義ニ候へハ此節抔ハ猶以の事存候計にて拙者抔ニハ迎も出
來不申候へ共わつかの事故何レとかいたし出来候様致度至願ニ候

神武天皇より天保五年迄ハ二千四百九十四年にて來ル子年ニテ二千五百
年ニあたらせ玉ふ事ニ候へハ前ニも申候通り當年ハ 西丸様御厄かたか
た故當年より取かゝり申度子ノ年ニは御祭ニても有之様致度事ニ候右件

々内願趣有のま、申進候故宜敷御指圖有之何レとか心願成就いたし候様
御工風至願ニ候右の上へ趣意内々 上の御聞ニ入候ても宜敷と被存候ハ
又表立願候方宜と有之候へハ別紙ハ火中可被成家
、別紙書取を入高覽度存候依一先別紙指添申進候也
老共ニても御宅へ遣出可申候
大久保、

二白 公邊にて被遊候へハ工貢無之候へ共御故障の義も不辨候故強て
不申

又拙者より爲冥賀願候て其義 公邊より京へ御申越ニ相成候上にて被
命候ハ、天下晴て出来候故有かたき事ニ候

又 公邊にて事を御越被遊候てハ不宜と申事ニ候ハ、拙者義幼年より
神道の事を好且又日本史抔も拙家にて出来候事故右のかどを以拙者よ
り關白へ申遣右のかどにて京より拙者へ被仰付候様表向 公邊へ被仰
越候ても有難キコトニ候

又 公義にてハ一圓御存不被遊方と申事ニ候ハ、内々關白より 叡慮

うかゝひ候上^一手^ニて御脩復いたし候てもよろしく此所ハ何レニても
出来さへいたし候ハ、
上の御武運長久の御爲ニハ可相成と存候故何レとも御指圖有之候様致
度事ニ候

年々鹿島靜吉田の御札指上來候處猶亦御厄年等の節ハ右御札^指外ニも
伊勢ニて御祈禱申付指上候處

神武天皇は人皇第一の 大祖ニ^候まし^候處是迄陵大破のよし承及何
とも歎敷義ニ奉存候^處來ル子の年ハ二千五百年ニあたらせられ候へハ
右陵^を大破ニ相成候を其まゝ指置鹿島等^計の御祈禱計ニてハ相當不存
と奉存候故當年ハ 西丸様御厄年ニも被爲有候故^右爲冥賀右陵御脩復
致度心願ニ御座候不苦候ハ、被入御聞候様頼入候也

青山下野守殿

大久保加賀守殿

此書面ハ入御覽候てもよき様ニ出て遣す下書

是迄神武天皇の陵御脩無之候處古へハ不存中昔以來万端

叡慮ニ不被任世の中故其まゝニ被遊候御義と奉存候處

數を押候

帝皇始祖の御廟右の如くニてハ何共歎敷義奉存候曆^を一覽いたし候處

神武天皇元年より天保五年までハ二千四百九十四年來ル子ノ年ニて二

千五百年ニあたらせられ候節ハ御祭ニても被遊候ハ、實以恐悅の御義

と奉存候^右以^依てハ此節より乍恐爲冥賀^小臣義幼年よりいさゝか神道

ニ心を用ひ候故爲冥賀此節より陵御脩復仕度至願ニ御座候

其かどを以^此表^{王家加州より返答次第ニて取捨ル}向^蒙 將軍迄^仰候ハ、命ニかえ候ても爲冥賀御出来ニ

相成候様可仕候右の段不願恐及言上候^以上^故苦候ハ、

叡慮御同等宜敷御扱可被下と殿下迄遣候下書

文面等如何可有之哉猶亦一覽可致候

御厄年ニ付と申事有之候上ハ一日も早キ方と存候

一畝火山ハ何レノ土ニ有之候哉失念故承り申候

七 徳川齊昭書付

〔藤田東湖宛〕 天保五年

山陵考

藤田虎之介へ

山陵之儀ニ付先達て内願の趣申進候處御繁多中御取調の上享保四年の類例迄御書拔ニ相成御懇ニ御示諭の趣畢竟ハ毎度御心易致候故かく迄ニ御諭被下候義と深大悦致候然ル上ニ又々申進ハ何事をも不辨者の様ニて如何敷且又一ツニハ何レ迄も愚意を押付ニ致候様御承知可被成と此義も甚心配いたし候へとも御書拔の面にて一覽致候へハ 桓武天皇と 神武天皇の相違も有之又御門主と三藩との相違も有之御門主にて御願被成候義相濟候ハ、行々異端道を以御宮等も可相立然レハ私ニ致候ても不相濟義

恐悦ニ存候處此度拙者より願候義ハ日本古代の製ニいたし候事故此處の相違も有之一にハ御書拔の面にて見候へハ陵廻り一二丁計も山門へ御附云々ハ少しく私も有之様ニてたとひ私無之ニもいたせ 神武天皇を御指置 桓武天皇の陵の御世話は相當ニも無之候へハ乍不敬ニ申分私の御願と申候ても不得已様ニ存候處此度拙者相願候ハ 大祖の御廟と申且將軍御武運長久の爲ニて今年ハ内府様御厄年ニも有之來ル子ハ二千五百年等統て先日申進候かトニて願候義ニて 公邊ニて被遊候ハ、莫大の御入用ニても又拙家方ニて致候へハ左程入用無之出來候工風も可有之

第一 大祖陵の義と申處と將軍家御武運長久の爲とを存先年ハ内願ニ有之候處いつ可申出時も無之候處 内府様御厄年中又足下へ如此御心易いたし候ハよき幸と存申進候處御書拔一覽致候てハ實ニ父母ニ別れ候様ニて力なく此上ハ迎も出來可申時無之と存切候へとも又存返候へハ御一席御相談の上と申ニも無之又上の御耳ニ入候と申ニも無之處ハ何レニも殘

念ニ存候故可相成ハ先日下野守殿と加州殿と御兩名認候封書御返被成候
へとも又々指出し候て御評議ニ相成候御耳ニ入候様ニハ相成間敷哉依て
ハ右書面指出候故文言惡處ハ御加筆の上又々認直指出し候てハ如何可有
之哉あまり何度もくとく申進候様ニて此處は何分くく氣毒千萬ニ候
へとも又幼年より今年迄色々考候上ニて申進候處をも被存候て今一御
扱御頼申度事ニ候不具

右の趣ニて認今一應可遣と存候故猶亦一覽可致候書外ハ甚五へ委細書
取ニても又ハ口達ニてもいたし可遣と存候

十一月十一日

公義^上事^之ハ實ニ御俗の事故却て御耳ニ入候ハ、御武運長久等の意味に
て相濟可申又たとひ不相濟ニもいたせ我等も 御守殿御養等ニ候へハ
上の御爲を存申上候事故惡敷ハ不思召義と存候故かたく御耳へハ入

度事ニ候又表のミニて出来不申模様ニ候ハ、 御守殿よりも何となく
申入候ハ、何レとか押付られ可申哉と存何レ別紙の趣を本ニいたし認
可申候

八 徳川齊昭書付藤田東湖宛(推)天保六年八月八日

「御筆 八月八日御下ケ
一月寺門弟
友鷲之事」

書附
之品

虎 之 助 へ
正 介 へ

尙々乍外も忠臣を引立候ハやはり此方の忠臣を引立候ニ相成人ニ恥を
知らせ候一端ニ候

先日病中友鷲義ニ付原田よりの書面遣し置候處又今日如別紙原田より申
聞有之上ハ 公邊御役方ニても我等の致候義ハとくに先方ニても承知と
相見え申候處右の如く忠臣の者の義只聞捨にいたし置候様ニてハ不宜候

故何とか一寸一口成とも脇坂等へ申入置候ハ、可然哉と存候猶亦我等より申聞無之ととも一寸も申候ハ、猶々よろしく可有之哉猶亦一口たりとも申込候て右様相成候と人々存候ハ、此家の威光ニも可相成と存候依右の段申聞候也

八月八日

小金一月寺門弟仙石道之助殿元家來神谷轉事友鷲一件ニ付此間奉申上候處去ル五日筒井伊賀守殿より寺社奉行所へ引渡ニ相成候處早刻つむきの着服帯共友鷲へ被下尙又取扱方拔群ニ相違いたし筒井家ニハ白洲ニ有罪人同様せんさく仕候由ニ處寺社奉行所ニ有惣席ニ有諸寺院罷出候場所ニ有吟味致扱方余りよすぎ友鷲も悉難有存居候由一月寺昨夕罷出物語ニ御座候尙又脇坂殿井上殿兩懸リニ相成候由ニ有一月寺役僧御呼出出奔人をかくまい候事有之候哉尋ニ付是ハかくまい不申友鷲

義ハ退身の者故かくまい候旨答候處尤ニ旨挨拶有之候由

一此度ニ次第いつれハ歟被尋候義可有之哉と奉行所ニ有尋ニ付御小人目付ハ尋有之申出候旨申述候處右様ニ有之者ニハ有之間敷余程駈と致候御方ハ御尋可有之旨被申候ニ付

水戸様ニ儀ハ御出入ニ事故申上候義有之旨相答候旨此間も委細ニ申上候事故

尊慮ニ有も有之急々脇坂殿へ引渡ニ相成候事と一月寺ハ心得候様子ニ見受申候此段奉申上候以上

八月八日

原田成祐

九 徳川齊昭書付

天保九年閏四月十五日

「御筆入 北地ニ事

戊戌閏四月望日御下ケ」

今日越州へ咄の趣申聞候一覽可申候冊ニ有之候通り故天邊の思召ハ如何

徳川齊昭親書 (天保九年閏四月)

二十五

可相成歟越州ハ遣し度心得之様に被致候へハ却て
上様へさし上候封書よりハ南北記事へ添遣し候書の方下書可致候松州御
添地ニ相成候迎別段拜領金も無之事ニ候ハ、松州の方ハ必ス可相濟模様
と被存候尤明日吉右衛門ハ常州の圖來り候ハ、領分近邊ニてハ此地と申
も可然歟ニ候へ共今日の咄ふりニては多分松州の方と被存大悦不少候何
レニも認明日ハ持參可致火中ノ

一〇 徳川齊昭書付

孫一郎宛 平右衛門宛 天保九年六月二日

御筆入

天保九年戌六月二日着御役振り同役中にも拜見之事前ハ
切り候る同役へも秘し申候事御下ケ

孫一郎へ
平右衛門へ

手元金ノ内ハ仕法の爲當年向々へ下ケ候員數

一金三千兩

是ハ常平倉仕法の爲利倍ニて町方へ當座預ケ

一同千百九拾兩

是ハ昨年分家取立金の余リニて今年郡官へ利倍ニ下ケ候金

一同三千六百兩

是ハ分家取立仕法余リ有之候へハ右同斷利倍ニて郡官へ預ケ
候金

一同三百五十兩

是ハ瑛想院殿下り候て隱居所出來申度候處時節柄勝手ハ金
子指出し不申事故是非拜領致度よし申聞有之老女よりハ御道
具向被進候處御時節柄表へ申出候ても不相濟候故御金ニて被
進候様度々申聞有之候故兩様押くるめて三百五十兩遣しニ相
成候

一同三千兩

一同三千兩

是ハ要害山城郭出來候仕法年賦貸出し

是ハ年々郷中へ馬預ケ候へハ追々駒出生領中ニ馬多相成候へ
ハ自ら耕作の助ニ相成候故已年より仕法致年々駄馬買上候處
宜敷馬も無之候故此度南部等へ貸付利金ニて駄馬上納等之仕
法大久保戸
田等承知

一千兩

是ハ大筒張立候入用之分

但し初年ニハ諸道具等も出來候事故筒數少ク出來候ても入用
多可有之と存候へハ千兩分引當ニ致置候金

二百五十兩

是ハ御拂相止候故不出

是ハ公邊御拂筒四千挺
の代

一二千五百兩

是ハ勝手へ年賦ニて下ケ候金子

〆壹万七千八百九十兩之

右ニ通り手元出金有之候へハ當年の義ハ常輪へ下ケ候義一切斷七
千五百兩上納ニ相成候上ハ又々勝手へ下ケ可申候

一七千五百兩跡埋の義二十万の收納ニ相成候節ハ五百兩ツ、返納可致よ
しニ候へ共十年余相成不申候てハ返納ニも不相成候故外ニ仕法無之候
ハ、公邊へ年々上納致候分拜領ニ可致候故右を跡埋ニ引當可申事

一中山下リニ付候ても先年千兩の拜借有之候へハ家内召連候ては千兩ニ
てハ下リ兼可申候へハ二千兩拜借ニ可致哉小身者とも違ひ中山山野邊
兩家の義ハ一國の浮沈ニも拘り不容易候へハ二千兩年賦拜借ニ致可申
哉左候とて手元出候義ハ不相成候故役金ハ千元金ハ千出し可申候
上納の義ハ山野邊と違ひ是迄土着ニ相成居候事故我等申落し 公邊上

納の義何とか相濟候ハ、其上ニて了簡致し明年々上納致サセ可申
又 公邊より御濟セ無之候ハ、五ヶ年迄上納御免ニて夫々追々上納致
候様可達事勝手取直しの爲下し候ても上納の爲領分金持より取候様
ニてハ中山の不徳ニ相成下り候て却て領地の者の失望候故不宜候様
一 手元出ル
三千兩

要害山普請の義にて手元下ケ候處中山と違ひ山野邊領地ニ相成の
てさへ人民不悅候處へ用金ニても申付候様ニてハ行々服し不申民服し
不申候てハ土着ニ致候せんも無之候故是以五ヶ年ハ上納御免ニて可然
候事

一 城郭ハ三千兩ニて出來可申候へ共普請手當の義も中々山野邊ニてハ出
來申間敷娘共の内遣候心得ニて 御守殿様御内意をも相伺置御守殿本
殿共不殘取拂候處遣し候心得ニハ候へ共是以被下候のミニても中々取
こわし又要害山へ立候力ハ無之と存候へハ此方ニて致し遣し候外無

之事と存候取こわし五百兩取立千兩と見千五百兩ハ何レよりか被下と
か拜借とか無之てハ相成間敷若金元出し申候歎惣交代とも相成候て
ハ役金よりも多分出候義は相成間敷哉と存候たとひ自分ニて致候にも
千五百兩位本無之てハ出來申間敷哉と存候○右様相成候へハ手元金
出候と役金元金出候三口ヲ壹万四千百兩ニ候處惣交代ニも相成候
ハ、夫々拜借金も有之事と存候へハ多分の出金の様見え申候

巳五千兩嵐ニ付五ヶ年賦ニて郡官へ下ル

午午々上納ニ相成候筈の處未ニ延ル

未午年分未の七月頃登ル右の内水戸ニて五百兩收入用ニ相成殘金五百
兩とりて經解森澤大筒等ニ使拂

申未之分此度登り候筈之處千兩勝手方へ手紙ニて下ル

酉申年分上納ニ相成候筈之處勝手方ニて申年同様手紙ニて下ケ候様申

聞候處酉ノ上納と難待五千金ノ内ニ酉年上納金ノ見通シニテ下ル

一一 徳川齊昭書付「金加役宛」 天保十年三月十九日

書附之品 天保十年亥三月十九日也

水戸頭取

金加役共へ

一 先日棚倉ノ武器類數品平瀉へ質入ニ相成候故不殘取入申度候處政府ニテ彼是申候故無據大筒拾五挺ノミ買入候やう相成右拂ハ兩金方ハ出申候彼是申候ハ、遅々いたし候内ニハ右筒外々へ遣候様ニテハ殘念故先ツ右の筒ノミ買入申候處外ニ武器類も數多の義帳計ニテ品ハ見不申候故如何とも申兼候へ共今江府ニても甲冑高直ニテ紙のはりぬき具足ニテさへ少しく念入候へハ四五兩と承り申候へハ棚倉の品惡敷ニもいたせ下直ニハ相違も無故何レとカいたし買入申度段元金奉行へも申遣候處彼役所ニても此節くり合候金子ニさしつかへ申候由故手元ハ五百兩

下ケ金いたし候様右品家中へ拂品ニいたし候へハ追々金子も上納ニ可相成段申聞も有之候處我等手元とても可出金子ハ無之候へ共金加役へ貯置候學校建立の分ニ引のけ置候金子五千兩有之候故右の内を三千兩此度下し申候故右を元金方へ貯置右金子の内ニテ前處拂品甲冑刀劔銅錫鞍鎧輿等行末用立候品々は一口ニ買入來春我等下りの上一覽いたし拂ニ扱せ可申と存候故元金郡官へ内談いたし候て速ニ扱可申候政府へかけ合申候へハ何のかのと申手間取レ申候内ニハ又々外々ニテ金出し候者も出來候へハ其方へ取レ申候故速ニ扱可申候

一 下りの上一覽いたし我等用ニ相成候分ハ取置餘ハ拂ニ申付候處金子と直ニ引かへ候者計ハ安心不致左候節ハ學校取立の金子ニさしつかへ申候故其節ハ上納金の方を元金役所へ廻し元金有金ヲ學校の方引廻し置不申候てハ下りニテ學校取立も不相成候故此たんハ元金奉行へも我等ハ申置候へ共猶又其地金加役ハ可申談候事

三月十九日

孫 一郎
平 衛 門 へ

一二 徳川齊昭書付「金加役宛」天保十一年四月廿三日

「天保十一年四月廿三日夜御下ヶ御茶製之事

御筆入二枚」

縁岡ニテ茶製申付候處此方ハ京地とちかひ水不宜候故出来方不宜よしむし候事故水の善惡にハかゝハリ有之間敷煎候とハちがひ何水ニても可然とハ存候へ共よき水ニこし候義ハ有之間敷乍然城下の中ニテハ中川水笠原不動の水ニよろしく候へ共京地の如くには無之よし佐介へ申聞有之候故愚案いたし候ニランビキニテ水を取置右水ニテ製し候てハ如何いたし候物か今少々の内ハ茶製相濟申聞敷候故少々ニてもラン引ニテ取候水



ニテ製セ見度事ニ候依申聞候也

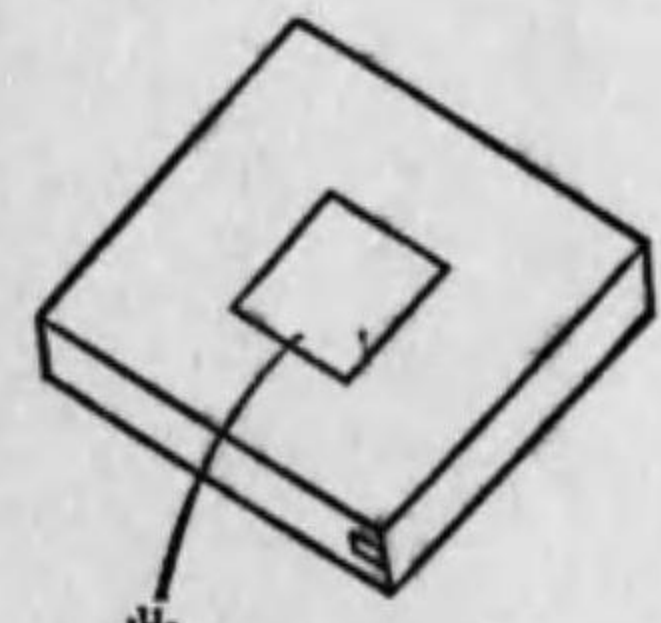
彌ラン引ニテ取候水ニテ製候へハよろしき事ニ候ハ、年々よき茶を

製候ハラン引水ニテ製セ可然事

四月廿三日

金加役共へ

先日茶撰盆を十計宇治の形にて出来候やう申聞置候處相考候ニ宇治のハ黒き盆ニ在之候處却て粟野塗りの方見分ニは可然と存候故左介へ承り粟野塗の方よろしき由申候ハ、形ハ宇治の盆ニならひ塗ハ粟野ニいたし可申候



此所三リン計高シ

金加役共へ

茶入用ニて江戸へ登セ候節ハ兼て緑岡へ預ケ置候シガラキの龜末の壺へ入登セ可申此地ニて入用ニ付取寄候節ハ少々の間故茶の氣の抜候事も無之候故此箱へ入指出候やう

加 役 共 へ

一三 徳川齊昭書付〔金加役宛〕 天保十一年十月十一日

〔天保十一年子十月十一日御下

五千兩御積金次第

御筆御下

八

本文市平認候通り家督の節ハ政府を初洗拔候節政府臺所等ニ有之金ハ皆々引上ニ相成元より手元是ハ先代より御手元御貯金なり貯の金子ニ加へ都合五千ニ相成扱又右手元の五千へ表々も五千加へ手元表兩口ニて一万ニ相成積金として

公邊へ出候利分の義は手元と表と兩方へ半ツ、取わけニ相成候右金子の義万一積金を下げ申候節ハ如元五千金手元へ返し可申年寄共の違命にて右やう相成申候處已年外金口にて積金に致し置候分を下ケ申候處先へ積候を下け候て後々積候金を其まゝニ致候ては不都合故表向は何レ迄も後ニ積候金子下ケ金ニ申立懷ニてハ最初積候金口を下ケ候にいたし候よしにて右様相成候處追おハ手元の金を下げ候よし申聞有之違命の證文返し候様申聞有之候へ共今以手元ニ有之市平等預り置申候義にて有之一前文所役所相改候節手元の方にて先代にハ年々御服の方五百兩ツ、の御かゝりニ相成候處當代ニ相成木綿等ニ改申候へハ一ケ年の仕込も甚減候譯を以先代迄ハ御手元へ二百兩ツ、上り申候金子五百兩ニ相加し夫ニて手元入用ニ相成申候先代迄ハ御買上品并御書物御武器類ハ御手元へ入不申皆表ニて扱申候處只今ニてハ一圓手元ニて扱候やう相成申候へハ金高ハかし候へ共中々引張足り不申之

一 我等手元へ年々表を五百兩

一 奥御用入用是ハ何程か不承候へ共二百も可有之哉

扱手元入用金と申處今ハ二季の被下等多分にて候へは右五百ハ大方我等の入用は奥表の被下ニ出候義と被存候處臨時思召とちかひ年々毎ニ相成候被下手元のミにて致候ニ不及家老初も御承知致候程の事ニ候間是ハ以來表にて扱せ候が相當ニ有之候甚五左衛門銀次郎等も委細承知居り申候哉と存候何程當代ニ相成手元金かし候ても書物武器前々表にていたし候事をも手元にていたし又指顯し候被下も手元にていたし臨時事は猶更手元にて致候と申やうにてはとても足り不申事に候常平扱手元ニ致候へ共是以自分の樂ニのミいたし候品ニも無之候へハかた〳〵奥表二季被下等ハ以來表にて扱候やう相談可致候事
大元を申候へは手元の金ハ全く御慰事の御用ニて有之候處大義存候者有之候へハ臨時ニ被下候扱か始まりニて夫々年々毎ニ相成今ハ其本を

忘れ候ていつも戴候者の様相成御役成の上下被下同様是も初ハ御役ニ相成御紋差候事不相成故被下申候處今ハ多とへハ小姓ニてハ御紋服差著カ用いたし候者も頭取ニ相成候へハ戴候事に成行類ニ候へは臨時思召ニてノ被下ハ格別例ニ相成候被下ハ表扱ニて可然存候

十月十一日

金 加 役 へ

一四 徳川齊昭書付「水野忠邦宛」 天保十一年

「御書」天保十一年庚子 御惣髪御ひげ之儀 水越州へ御文通案

輕暑ニ相成候處彌御萬福令雀躍候過日ハ御繁務中御返翰毎度令多謝候三候より書物未出來不申候へハ夫次第ニて拙の内願御調ニ可相成扱又發候機ニ至候ハ、勿論

尊慮の事ニ候へ共兼て御咄置候義御合可被成段忝存候何分内願相整永世

天下の爲ニいたし忠勤の名をも残し申度事ニ候扱又此度ハ三下博大小耳目を驚し眠もさめ候半またく三人のミニハ有之間敷實ニ近來の御美事ニ可有之奉恐悦候御代官杯ニより候てハ御收納の御損益ニも拘り候半是等も御手入候事ニ可有之又文武藝能も無之非常の手當なきのみならず祿々として祿のミ費候人も多かるべく候坊主杯ハ何年か不勤いたし候のミならず如何敷御扶持人も可有之哉無益の御人多ハ御費のミならず害ニのミ成候事故追々御改正ニ相成事とは亦恐悦ニ存候奥向杯も御取ペリニ相成候ハ、是亦御益も出可申近世の御美事有かたき事故内々申進候

別紙拙者事前髪取候節ハ朝月代いたし候へハ晝頃より眩暈いたし候故狭ミ申候處家督後ハ登城もいたし候故無據すり申候處此度湯治かたく願の上下り候事故試ニ惣髪ニいたし置候處至極よろしく扱又幼年の節前齒代り候時つよく打かき尤かけ候まゝニて齒の延申候處折々年の秋ハ齒の

根へこつそとか申者出來かミ候て毎年春秋ニハ別て難義いたし候處口中の義ニても死ニ及候者追々承り候へハ幼年ハ是迄色々手をつくし候へ共治し兼候處承り申候へハひけヲ立候へハよろしき由申者有之候故是も試ニ當春ハ立候て見申候處正月の頃は甚六ヶ敷候處此節ニ相成候へハ齒も先ツ居りうミ候事も無之先ツよろしき様ニ被存候乍然御届も不申惣髪或ハひけまで立置候も如何故此度御とゞけ申候處外々の義ともちかひ病ニよりに願候事故可相成ハ御聽うけニ相成候やう致度候尤甚鬱陶敷候故爛齒も治し申候ハ、又御届申候上ニてすり可申候此段御同勤へもよろしく御頼申候也

一五 徳川齊昭書付「家老宛(推)天保十二年八月廿二日

「八月廿二日朝御下ケ

御筆」

徳川齊昭親書 (天保十二年八月)

大名等ニても追々御續柄又は左なくしても 思召ニて被仰出候義有之此
度居延杯被仰出候義も全ク何レニ例も有之間敷候所全ク 思召ニて被仰
出候事と相見え申我々初一同ハ勿論難有奉存候へ共第一外大名とちかひ
御内高と申ハ無之長々御引分レニ相成候へハ御入用ハ申迄も無之何程御
國政御世話被遊候やう難有 仰を蒙セラレ候ても如何ニも御指支ニ相成
申候處此方杯の如く長々江戸ニのミ御つめの大名ハ御役人の外ニは無之
御役人とても其御方の御在役の節のみにて此方様の如く在江戸ニのみ御
代々被爲入候御家も少く候へハ申さは外大名とハ別ニ候へハ此度實ニ御
暇被下置候事と見え申候處 思召を此此^{方カ}より御願と申ハ勿論一切不相成
候へ共 御簾中様ニても 御臺様への近キ御續きも有之又前文の如く外
大名と相違のかどニ有之候へハ越州殿ニて何とカ御扱振も有之 思召ニ
て被 仰付候ハ、外ニハ故障ニも相成間敷被存候へハ是等の義今一應御
懇意被遊候御方故御内々越州殿へ御申上ニいたし度中納言様ニても實ニ

御簾中様兼々御屈症被爲在候故深く御心配被遊候故有之杯申義も書加可
申相談いたし何レの道明日虎へ可申遣候我等も申遣度候へ共如何ニも
胸痛ニて認兼候故各々可申遣候

一公邊御代替の節三家共計は誓紙指上不申

一京大阪詰大名妻子召連候事

但し右は在所とハ相違いたし候へは尤可危と申ハ在所よりも危く候
へ共御疑無之故也

一此度の如く長々在邑ニて世話致候やう被仰出候義外大名ニてハ不相成
候處全く三家故被仰出有之へき義ニ候處簾中下りの義不相整候てハ外
大名も同様ニて折々永く世話致候やう被仰出候ニ面目をも失ひ申候尤
母子共江戸ニ不居義ニ候へハ願をも出し不申候へ共母子とも江戸へさ
し置候上ハ大阪京在番の御見通しニて頼相整候やう云々

一右様ニ相成候て御故障の程も難計候へ共是迄八ケ年も國ニ居候義此家
 ハ勿論尾紀兩家共二百餘年の内無之例ニ候へは右様の義又とハ有之間
 敷候へハたとひ此度御濟セニ相成候ても先ツハ御故障も有之間敷又万
 々右様の事兩家ニ有之候とても同じ三家の義ニ候へハ母子を江戸へさ
 し置候上ハ簾中國許ハ願候義相成候へハ難有奉存候第一此方家ニ如く
 長々江戸ニのミ是まで相つめ候大名ハ一人も無之候へハ是等の處をも
 被 思召猶又御評談ニ相成候やう越州殿ニハ毎度御懇意ニて只今ニて
 ハ御用向御願の御方ハ越州殿計故又々御申上ニいたし度候

過日越州の申聞承り申候てハ又と虎之介ハ出て申事も相成間敷候故右之
 談國許へはこび申候へハ國許々ケ様申來候よしを此方ニて認候より其地の模
 様相分申候へハ其地ニて案
 内いたし誰
 へそ認させ申又々持出し同様の事ニハ候へ共今一應御相談申由申聞べく候

奥御殿下向之義此度相濟候へハ幸 哀公十三回忌故瑞龍拜も致させ度又
 持痛ふさきも有之候へハ湯治も致サセ度兼ての内願ニハ候へ共とても申
 出候義も不相成候故願も不致又下向不相成候義定故只ニてハ御故障ニも
 相成願兼候へ共此度無例の居延ニ付て勝手計ニも無之右内願の處をもと
 へけ申度故此たんも書加可申候瑞龍可拜の義も孝道の一ツニ候へハ是を
 申立候てハ外々御故障ニ可相成故不申立候へ共居延の義故下り申候へハ
 内願も相叶候故書加可申候

家 老 共 へ

書附之品

一六 徳川齊昭書付

藤田東湖宛(推)天保十三年十一月

書附之品

虎 之 介 へ

精宮殿義ニ付前文委細承り申候左候へハ彌此方と相見へ申候所年内成來
 春成表向被仰出候ハ、勝手窮迫の義ニ付土地方相頼候へ共不整御守殿有

之簾中有之尙又鶴千代簾中出來候てハ何レニも不行届候故引取置候て手
 輕ニ扱可申含の處不相整
 公邊御定とハ乍申戰國中ニも母妻悴と人じ、取候義不承尙三家の義ハ御
 疑可有之筋ニハ無之候へ共諸大名の御仕置ニ三家迄も人じ、ニ御取置被
 遊候事故永々の在國ニ候へハ簾中義湯治御暇ニ可成共下し度由相願候へ
 共不相整左候時ハ早世の者無之候へハ江戸茄藍計壯大ニ相成申候故簾中
 とも申合せ此方祖宗源威ハ簾中無之候故以來簾中ハ相止候心得ニ罷在申
 候故兼て相願置候土地方并簾中下りの義整候ハ、可奉願左も無之候ハ、
 以來簾中ハ相止候心得ニ罷在候故御免相願申候と表向の答をハ不致置候
 て此たん直書ニて可申遣と存候事左候時ハ黑白も少しハ模様可分と兼て
 の一策ニ

精宮様御事ニ付奥御右筆改取候運ひ等奉入 高覽候此段乍恐奉申上候

以上

十一月六日

藤田虎之介

尙々本文ニ御儀ニ付明五日宿次
 奉書相渡候由ニ御座候已上

以書付申定候ハ、
 精宮様御事

上様御養女ニ儀明五日と被仰出候由就夫御縁組御内意も同日被 仰出
 ニも相成候哉ト其筋取繕候而已明日ハ御養而已被
 仰出御縁組ニ儀は來春被 仰出相成候哉ニ相聞候由別番ニ通御城付申
 出候間御心得迄可申今一度被仰付候條御申參宜、御取計可被成候已
 上

十一月四日

傳五郎

唯之允

松三郎様
長八郎様

拜呈昨日一寸御内話候

精宮様御事今朝長野へ承り候所明後日は先ッ御養女と申儀被
仰出候計ニ御縁邊御内慮直御參府之上ニも可有御座候哉未らち分り
かね候間尙又近日内談可致旨申聞候間此段申上候已上

十一月三日

一七 徳川齊昭書付「水野忠邦宛」天保十三年

「天保壬寅歟 水越へ御建論の御腹案

御筆」

先日打拂御止の義ニ付如何の義と申進候處御役よりハ御申兼老中へ承り
候やうとの義何も承り直ニ可承とも存候へとも右やう不見識なる人の處
へ申遣候とても日本の安危を實意ニ考も無之文化の達を變候位の者ハ申
遣候とても申譯をいたし候のミかゝり夫のミならず指支候と 上の思召
と申義毎々老中のくせニ候へ共 上の思召ニても御爲ニ惡敷ハ於拙てハ
宜敷とは不申上候へ共只互ニ筆を費候迄故不申遣候加賀再來を待候外無
之候扱又此度は打拂ハ被禁三本帆の舟ハ不相成異舟ニハ出會不申やうニ
との義是も如何ニ被存候故左ニ申進候其他序ニ心付候義示添申候
一此度舟の三本帆御制禁の御達有之候處御制禁の段は日本ハさて置外國
ニても存居程の事なれハ誰とても御制禁を犯し度ハ無之候へ共内川品
川杯いふ様の處にてこそ可相成山の如き波打外海ノ半ニして風惡敷相
成時ハ荷物を初其身も海へ沈む事をおそれ一刻も早く行へき方へ行き
度二本も三本も帆をかける事にて舟の製作は手丈夫ニ出來候を御禁帆

は一本にかきるへきよしにて外海を御用ニても御のらせ被遊候ハ人情ニはつれ候御製故たとひ此上御制禁ニても模通り不申事之誰より建白いたし候哉例のしやくしを守る方より言出候半か其者を八丈へ成とも又ハ浦賀より奥州南部の邊へ成とも御のらせ被遊候ハ、果して一刻も早く先へ行度三本ニも五本ニも帆をかけ度可相成たとひ一本ニて行兼たりとも心中ニ危ク思ひ格別なる御定トハ思ふ間敷候拙子抔海をもり又度々口川ニて難舟を見及ひたれハ疊の上の了簡トハ又思ひやる之舟も如何ニも丈夫ニして帆も異舟にて三本かけ候ならハ五本も十本もかけて乗せ度存候也異國へ渡らん爲ニとの古人の未不開時の思召はさも有へけれ共今ハ法をやふり異國へ渡らんと思ふ程の人有らハいかて帆計御法を守りて一本かけ可申哉手薄き舟の作り方トハ乍申風波悪敷節飄流してさへ異國迄も行者有之候へハ風を見すまして乗出候ハんニハ十か九ツハ異國へも可行事ニ。全く定木を守る方は夫カ役なれハ何も

かも定りをいふへけれ共攻事ハ活事にて掟のミニて行ハるゝならハ君も臣もいらぬ事之其時々之君の御下知を守るこそ有へき事なるへし右ニ通故三本も三五も勝手次第ニ帆をかける事を御免被遊舟も人命ニかゝる故人々の中だけ如何様ニも手厚ニつくりて異舟に不出會やうニとならばさもあるへきを帆ハ一本ニかざるよし御達ニてたとへ□□□しハりてはだかにて追人ニまけずにげよといふも同斷之扱又此方の舟外國に行をケ程ニ御制禁ニて彼方より來るを御かまゐなきといふも聞えぬ事之異舟ニ出會事惡敷とならハ日本國中外海の舟を御禁かよろしく又外海の舟是迄の通りにて出會不申やうにとの事ならハ自由自在ニ相成様ニしてにげのびるやう御達がよきニ異人とても日本人とても海岸近へハ危き故五百石千石舟とも相成時ハ舟道は多分同斷なり外海をのるから異舟ニ不出會やうニハ不相成事之只出會たる事を届る時ハ呼出されて迷惑なれハ誰も不知くといふを實と思ふハ大なる愚な

る事之

一異國より日本を取らんとする術を察するニ一ツニハ長州の交代二ツニハ飄流人ヲ懇ニ送り來りて交易を請三ニハ此方の人送るニ不及よし云時は異人飄流したるを返しくれよといふ否といふ時ハ日本人ハ大不仁也といひて日本人ニ異人ハ仁者のやうニ思ハせて馴る術之四ニは横文字の書ヲ渡し置て色々様々の珍事を知セ横文字の稽古出來在時ハいつニても文通なるは一ツの策之故ニ 將軍家ニ名聞を好ミ給ふ御方有之歟又ハ異國へ義理立し給ふ御方有之歟又ハ異國の玩物を好ミ給ふか又ハ好事にて紅毛書中を以品々珍物出來候を好給ふ御方有之候時こそいと危き事之されハ長崎の交の十萬内外の御金ハ御取ベニても出可申事なれハ是迄數多金銀銅の寶を彼か國の一時の玩物を取かへられたる日本の損ハ無已ハ右交代を早く御止メ日本人送り來らば送るニ不及よし申通し其上ニも送り來らハ日本人共打拂ひ可申又横文字御禁し一切

此方へ手つる無之様ニして此國さへ武を備被置二本指たる者ハ勿論下々迄も一人として日本へ生出たるからハ死とも外國人の手ニ付心無之やうニ仕向給か此先万々代も動なかるべし只今の姿ニて遠慮する時ハ實ニ御危ニ御仕向ニて日夜寢食を不安故乍例存分吐露いたし候也

新見殿之品

昨日焔硝等之義ニ付諸所舊場置場等見歸申候故か昨夜ハ唐人ニうかされ鼻の先へ敵カ來り有之様ニて夫より例の癖起りふせり不申色々相考ふせり兼候故床中認候請いたし先日之答ニ新見へ可遣存候所一覽可致候

横文字の處へハ大名とも認兼候故万々此後彼大搯様の者有之無本の加勢ニ横文字一片認させ異船へ渡し遣候ハ、先ニてハ兼々日本を取度候

へとも手引なき故手をつかね居候半かよき幸と直ニ來り可申其上ニハ無本人も責殺されて全ク夷狄の術中ニ落可申云々と入度

横文字の義ハ故泉州故中務へも申聞候へ共大眼無之哉評議ニも不相成昨年又々書取ニして同年五月九日越州へ遣候處今以何の御沙汰もなけれハ同斷なるへし横文字ハ此方いろはよりも文字少なく覺よく便利のよしなれハ廣まりたる上ハ御禁ニてもとく間敷今此方のいろはを御制禁ニせんニハとく間敷之又何程異國の交りを絶へきよし漁民等被命候とても横文字を一片かきて舟のりへ頼ミ異舟へ遣人あらハ直ニ文通ハ成事なり吳くも早く御禁ニ致度事之

又御法を守る者ならハ手丈夫の舟へ何本帆ヲかけたり共行者ハなかるへしわざく異國へ行て交易したり共品物つミ來れハ直ニ分る事ニて

顯れハ嚴刑ニ被處事なれハ只遙々行て此國の品を先へ遣す者ハ決してなき事之大舟造作ハ禁一本帆ニ相成候事ハ永祿天正の頃此方漁民唐へ行て亂暴せし故唐ニてもてあまして此國へ頼有りし故禁らるゝと覺へし今彼方來り亂暴するおそろしとハ餘りの相違之

昨夜ハ夢ニ御本丸近火ニて出馬の義を見胸をいため申候全ク夢ニ致度事之

本朝を呑んとする異國人へハ御憐恤を加へ給ひ打拂等をは被止早々好の物をハ可遣よし日本人ハ異人に不出會爲ニとのミニて舟を手丈夫ニ造事をハゆるし給ハす却て是まで人ニ見濟置たる三本帆までも被禁て毎年數多の人民海中ニおほるゝをは御かまゐなきは御仁政ニハ相當とも不思や又舟道を可定よしの達なれ共舟道ハ是迄迎も定ハ有るゝたと

へ有ても通舟するからハ十里廿里も出る事にて漁事とても同断之然るに異人は海岸まで近付事をゆるし給ひ日本人ニは不逢やうニとてハ一寸も海へ出る事ハ不相成譯也漁事通舟をさし被置候て舟も手薄く柱も少くしてハとても大波をのり切事も不叶はにけのびる事も不叶ハ出會するは當り前之只舟乗共不出會といへハ夫を實とするも大愚といふべし

一八 徳川齊昭書付「金加役宛」天保十四年二月

「御筆入」天保十四卯二月御下
羅漢寺材跡埋等之儀

一四十二挺之筒旗本備へ組入申度金衛門へ申聞表入用ニて出来候筈ニ相成候處木品まで買上と相成候てハ莫大の入用ニ相成よしニて手元ニて貯置候桑畑のけやきを下げ全ク工料四十餘兩表より指出しニ相成工夫の神發流臺車共出来申候て右けやきの跡埋ハ金衛門ハ矢倉方へ相達候

筈ニ有之候處手元ニて申付候品の外迄も右けやき追々矢倉方ニて用申候へハ金衛門へも申聞尙又普請方へも申達候て其時ニ我等ハ指圖無之中ハ一切出し不申やう相達矢倉方ニて入用之事も候ハ、其時ニ加役共より承り候上ニて用候やう致度事尙又是迄用候分普請方ニ留記も可有之候へハ右たけ矢倉方ニて早々跡埋いたし候やう可申付候事

金加役 共へ

一九 徳川齊昭書付「水野忠邦宛」天保十四年閏九月九日

過日認候のと見合可申
追ふ冷氣ニ相成候處起居萬福雀喜之至り存候扱ハ先月重陽ニ大船造作并島々へ出張等の節の良策之義建白の方へ御推問之上拙へも御教示ニいたし度由申進候其後八月十五日九月三日御連名ニて進呈候御答ハ到来致候

所右御推問の義ハ未何等御答も無之日夜相待申候船艦之義不相成上ハ右御推問之所承り申度はや三十日ニも相成り申候へハもだし兼此段御聞申候也

尙々執法姑息ニのミ有之候てハ實ニ行末天下の御爲如何と存候故大小名ハ勿論有志の族へも廣く御かけニて善を御用ニ相成候やう致度異船の來りたる時ハ其時之事抔申位ニてハ甚御爲不可然候や

壬九月九日

越州殿

齊 昭

之品

八月十五九月三日の貴答として九月十九日付朶雲令披閱候有先以何レも御壯健御繁務中御返翰令多謝候印情ハ下拙推察之通り云々堅牢の船艦ハ全邪敷一條の譯ニも御心得不被成且又弘く御免と相成候ハ、西國大名初種々工夫致し異様の製作も出來候御法度御取締ニも拘り御大切之事故御

聽ニ被入候迄も無之御熟評被成候よしいつも田舎人の了簡不宜段ハ勿論ニ候所御聽ニも御入ニ不相成段畢竟御懐と齟齬致候故ニて拙子義を御厭故と令多謝候必ス御聞ニ入申度存候ニハ無之全く日夜御爲を存候心より無伏藏建白いたし候事ニ候へハ此後とても宜敷御頼申候扱異様の船艦と申候ハ、左も可有之候共船の實用ハ人並荷物をもけがなく渡し候か船の本意ニ候へハ古代早く心付候ハ、わざ／＼ケ様危キ船ニハいたし申間敷畢竟ハ只今の船便利と存候事故此通りニいたし來り日本風の船と申事ニ相成候半左候へハ船の形様ハ如何様ニても御法度さへ被行候ハ、可然船ハ當時の製ニても御法度不行届候てハ如何と存候依てハ弘く御濟セ不宜候ハ、せめてハ狭く成とも御濟セニいたし度夫ニても船大工等心得有之者出來候へハ非常節右を頭梁ニいたし又ハのりなれ候者を上のりニいたし候へハセまくても不如無かと存候既ニ北地御領の節ハ大筒等かけ候御船も御座候へキ何とぞ 上ハ勿論御出來三家溜詰位迄も御濟セニ相

成度事ニ候尤其中船なくとも不苦心得の人も可有之候へハ願候者へハ御
 濟セニいたし度事ニ候御深意云々ハ何事か不奉存候へとも内憂有之候て
 も 上ニ有りて外ニなきハ格別 上ニも外ニもなくハやはり互ニ有之も
 同様ニて只船なき時ハ異船防禦の御手薄迄ニ可相成哉と存候扱又鎖國ニ
 御趣意ニて堅牢の船艦不宜との事ニ候ハ、無二無三ニ寄付不申やう打拂
 候ハ格別其義ハ御さしとめニて鎖國ニ付船のミ不相成との義ハ如何いた
 し候事か定て建白の腐儒有之事と存候船艦ニなくしてハ島々へ出張被致
 候節如何可被遊哉右建白の人も候ハ、御推問の上御教示ニいたし度相待
 申候先ツハ御返翰の御挨拶かた／＼申進候也

九月九日

水 戸

源義代ニは快風丸等の大船追々出来黒坊杯迄長崎を召抱今ニ右子孫と申

傳候者も有之位の事ニ候處其後代々源義程ニ外患を心ニかけ候者も無之
 尙又窮迫故船の手入も不相成成行申候へハ拙子義兼て再起いたし度存候
 處當春不□源義の意意をつき候やう上意をも蒙り候へハかた／＼自分計
 ニてハとても天下の御爲ニ相成候程ニハ至り兼可申故弘く御濟セとハ申
 候へ共弘く相成不申候ハ、狭くも御濟セニいたし度事ニ候

追考申候處

右の趣をも加入可申哉此方船大工ニ大船出来候者有之候へハ御用の節な
 きニハまゝ可申被存候如何

二〇 徳川齊昭書付

天保十四年閏九月

御筆

癸卯

閏九月

郷南模様

令一覽候中間部事ニ付てハ我等異説より是迄誰も不申説全くの異説故さ

徳川齊昭親書 (天保十四年閏九月)

らニ取ニ不足義勿論なり

一間部事ハ越州のつゞき有之か又ハ間部ニ隱居して居り候〇〇院大御所様上臈所
 の花ぞ越州の方ニ續有之歟ハ不存候へ共當春越州娘を右花園所へあづけ
 御本丸風ニ仕込右大將様御腹お三ミ歟つアヘノ養妹也とり持ニて大樹へさし上げ
 奥を手一盃ニ致候沙汰有之候處此度の敗レニ付てハ必ス右の事發候半
 夫ニつきてハ間部ハ自分の處へさし置候隱居へ水越たのみ居候ニハ
 候へ共 上より水越の柳澤の致方ニ付てハ右やうの事實ニ有之哉間部
 へ御かけも難計左候時ハ間部は右やうの事ハ夢々存申間敷候へ共自分
 の方へ越の娘來り御本丸ニ花園仕込申上は申開キ不相成事ニ至り候の
 か共被察候右ニてハ甚むこき事ニ有之候世上ニてハ柳澤云々々さざし
 の事夢ニも不存事故沙汰も無之のかと被存候又左衛門へ内々承り候ハ
 、少しハ此意味も可有被察候

二一 徳川齊昭書付藤田東湖宛（推）天保年間
 書附之品

虎之助へ

牢中不正ハ大學家臣より
取候書取ニても明白也

一 牢中不正之事御改可然事

一 濟許ハ相成たけ可早事

但シ人の死生ニ拘り候てハ束たすに不致義ハ勿論ニ

一 輕キ罪人永々入牢の時は當人のミならず親類縁ゆかり迄も入費多百姓ハ田地
 をつふしつる處村ま脱カの人別相減上の御損ニ相成可申候事

一 百姓の辛苦艱難して作り出したる米穀罪人ニ永々被下候も無術也輕重
 の罪を分ち重き罪ニて品々相治候義不相成ハ無之輕きハ留牢の中ニて
 人々手仕事をさせて右ニて米憎を求サセべし何程愚なる者ニても草履
 位ハ出來可申ニ

一 徒罪御用ニいたし度事

是ハ近頃拙家ニて用候處宜策なる事也

一刑の義ハ重き事ニて容易ニハ申難く候へ共人を殺す程不仁ハ無之候へハ親殺主殺ハ勿論人殺ハ甚嚴重ニ被遊候て其余打首杯ハ皆一命を御たすけニて此國ニ一人ツ、も人の多き様ニいたし度尤遠島ニても何ニても命さへ有之候へハやはり夫々の御用ニハ立申候事

但牛さきニても何ニても外よりは猛烈ニ見えて當人ハ一思ニ死るやうの事ニいたし度ニ

本文ハ過日認候中へ入申度故乍同様の意認遣候

一右ハ一冊ニいたし海防掛へ遣し候方可然尤右ニ内紅毛學の義ニ付越州へ昨年申遣候云々等有之候へ共外ニ惡敷事も出入無之候へハ申遣ても不苦存候度々申遣候も如何故海防心附ハ有りと有らん事を認候方可然尙文末ニ至り候ては不御挨拶を待居候位ニせめつけ候方も可然實ニ公邊の御趣意兩端ニ相成置候てハ指支候事也扱又三家初諸大名の手當

御聞ニ相成候からハ三家ハ時ニも依候へハ御休机代をも御勤候半故公邊の御手當御筒ニ員數等海防の分爲心得伺度よし二白へ成共認込可申敷少しハ左候ハ、公邊ニては御不手當と申事も相成間敷又此方へ偽のミニも相成間敷候へハ何レ公邊の御爲ニ可然候へハかた／＼申遣候半敷と存候

一右ニ義ハ不入御聽候てハ不相成やう認可遣存候

○土井等兩人答ニハさしつかへ可申候へ共越州とちかひ此方の害ニ不相成上越州が此方へつき可申候へハ思ふ様可參存候

二二 徳川齊昭書付（推）天保年間

○甲斐庄喜右衛門長崎奉行仰付らるゝ時日本にてハ御當家御亡ひ他人天下を取ても是ハ御一分の御耻はかり之異國へ日本の地一寸なり共遣候ては日本の耻なり左候へハ大切の事なるニ付随分油斷仕ましき由也實ニ三

代將軍様の思召ハ如此廣大の思召ニ被爲有候へ共扱又只今と相成候てハ異國へハ勿論の義此天下を外々へ被御取被遊候てハ却て不相成段勿論ニ候へ共追々申候通り北地を只今の姿ニ被指置万一ニも國狄のさハき出來候へハ必ス日本内ニても其機ニのり騒か立可申先年クナヅリへ五六人來り候ニてさへあの通りのさハき故千艘余ものりつけ候ハ、松前迄をも取レ指見え日本内の騒きも大變ニて可有之候へハ右を御先見被遊候て事なき内御手當被遊候やう致度事ニ候

後ノ字脱醍醐帝ニ御時楠正重正深く御爲を存入先見の義共數度申上候へ共御取用無之追て正重申候通り成行候節人々發明 帝ニも御發明被遊にはかに楠へ官位等御進メ御用被遊候へ共楠申ハ右故追々申上候時ハ御取用無之只今ニ至被仰付候てもいたし方無之とたつて御辭退申候へ共楠外ニ猛將無之候故同人へ被仰付以忠打死いたし今ニ至候迄楠の忠臣を賞譽いたし候へ共 後脱醍醐帝ハほかおろひ給候義太平記ニ有之候何程の明將ニても其機ニ至

り被仰付候てハ致方も無之只身を捨て忠を盡候までニて御爲ニハ不相成候故防禦の義くれくも只今の内ハ御仕法にいたし度事ニ候

御遺訓の末大猷公ニケ條但左の意ニテ終り也依てハ右の跡へ實に云々跡の文認可申哉一寸承り申候

四閣老名前の跡か又ハ別紙ニ

亂妨ハ不足憂蠶食ハ可患事甚敷云々ハ兼々申候通りニて長崎ヲハ度々亂妨致候へ共亂妨ニてハ一寸の地も被取候義無之處古へハ蝦夷の義ハカンサツカ迄ニ候處追々蠶食いたしラツコ島迄數島北狄へ御渡し候義別冊の尊慮ニて相伺候ても日本内の義と違ひ外國へ徳川の武勇の衰を御示し被遊候義甚残念至極ニ奉存候依てハ拙御内願ハさし取置何レトカ只今の中御仕置御座候やう致度事ニ候御承知の通り武を備候は戦を好候ニは無之却て戦無之やうニと前方ハ手當いたし候事ニて本文ニも申候火事用心と同じ事ニ有之即字義も戈ヲ止ルの譯ニ可有之候天下の模様隱性の傷寒の

如く相成候てハ御爲不可然と被存候

二三 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」(推)天保年間
書附

之品

虎之介へ

如此所左衛門申來候處是迄の宿願力落申候此方へ北御任せニ相成候ハ、却年々千や二千願候も不相分松ニて千ツ、十ヶ年上候方との申出候つき候事と存候かさて、致方も無之年來神佛へいのり候せんも無之者ニ候とあきらめ候外無之候我等の了簡ニてハたとひ年々万位ツ、御そん有之候ても北地を右やう致置ハ如何と存候處わつか千兩ツ、の事ニて内願不叶様相成義致方無之候

十月廿六日

松前志摩守

其方儀先々代志摩守の舊領被返下候以後引續家格被直下彼是蒙御厚恩候付爲冥加永々金千兩ツ、年々上納仕度旨内願之趣達御聽奇特之事ニ被思召候永々ニは不及十ヶ季上納候様被仰出之候

右土井大炊頭申渡之候

十一月朔日

貳万石御加増

松平兵部大輔

拾万石之格

右 御直ニ被 仰合候

右 同人

其方儀外御續近之面々ハ格別高低之義に付出格之

思召ヲ以拾万石之格被成下候旨被 仰出之

右於御黒書院御縁頼井伊掃部頭御老中列座水野越前守申渡之候

名代 松平大和守
松平日向守

出羽國庄内に所替被

仰付候

右同席列座同前同人申渡之候

名代 酒井左衛門尉
酒井攝津守

越後國長岡に所替被

仰付候

右於御黒書院溜列座同前同人申渡之候

牧野備前守

名代 牧野遠江守

武藏國川越に所替被

仰付候

右於芙蓉間列座同前同人申渡之候

右に通御城書に出候間認取奉入

高覽候

御筆御下ケ被遊謹に奉拜見候逐日寒氣ニ趣候處益御機嫌克被遊御座奉恐
悦候然ハ此度御添地御再願御進達被遊候

思召ニ付委曲

御下知ニ趣奉畏候彦九郎にも御筆拜見爲仕逐々申合御不都合無之様致度
奉存候

右御指出ニ儀段々拜讀仕候に日限等引合ニ上去ル二日彦九郎

御書持參仕先日之御挨拶旁申述今四日登

城前私共罷越前守に

御進達書御指出ニ仕候此度ハ尾州様ニも御村替被

仰出其外大名も所替等御座候間御時節御到來之處と奉恐悦候何卒此度は是非御再願御成就被仕度奉祈願候御拜借金之義此節之御模様ニ亦は壹万位之御振合ニ御座候由御城付申聞候御手續之義も無油斷精々爲御懸合仕候間今五千も御返金ニ相成候様仕度候今朝も御催足申上候間御早様御濟に被仕度候尙委曲之義ハ彦九郎も申上候間御承知被遊候御儀奉存上候且諸家國替等も御座候ハ、申上候様奉畏候去ル朔日御城書にも出候間高覽相濟候義とは奉存候へ共別紙ニ認取奉入 貴覽候右御請之義宜敷被仰上候様仕度頼入存候已上

十一月四日

興津所左衛門

御側衆中

二四 徳川齊昭書付〔水野忠邦宛〕(推)天保年間

扱ハ北地の義ニ付追々御咄申候義も候へきか猶又此節南部津輕の模様如何ニも不宜兎角やゝともすれば兩所を起り立候事も有之候處兩所とも此節ハ甚窮迫いたし候義ハ御承知も可有之候へハ分て不申候處北之内願整もいたし候へハ水戸も海上にてハ何程の間も無之候へ共可相成は南部も表向ハ廿万津輕も十万ニ候へハ我三十五を廿ハ南部十ハ津輕五ハ松へ配當被仰付候とも此節ハ極窮いたし居候處と申且三人とも俗人にて江戸近へ出候義ハ果て好可申候へハ此節を幸國かへにいたし度事ニ候南津松と拙領ニ相成候へハ別て松も近く候故猶以行届可申夫のミならず外様は□好悦セ候てつめ候にハよき時節ニ候尤拙城ハ日本中ニても指折候程の大城にて候へハ外様へ被遣候ならハ本城の方計とか又は二ノ丸の方計とかに不被成候ハ、大ニ過可申候一人ハ手綱の城一人ハ川介の城にて随分

よろしく被存候夫も如何と有之候ハ、可然大名を水戸へ被遣水戸をたね
 ニ被下候ても可相成候拙も水戸を捨候て万民出奔いたし候地へ此砌轉候
 ハ難義ニハ候へ共外夷の肝をひしぎ又日本の爲と存候へは何卒右様致度
 事ニ候尤拙國ニも瑞龍山ハ代々の墓所有之候故瑞龍一村は飛地ニて拜領
 いたし度事ニ候たとへ南輕今ハ餓死出奔の民倍胞ニ候とても右之地へ移
 り追々仁政を施申候ハ、人も加し可申哉と被存候北之評議も起り候て若
 々有様之義ニ相成方よろしくとの事に候ハ、拙ハ願候所ニ有之候故御評
 議ニいたし度伏御頼申候事故御含ニいたし度候

越 州 殿

二白南輕松の收納高如何程ニ候哉不存候へ共拙杯も何事も表向の申立
 ニて勤向等もいたし候へハとこまても表向の所にて御引かへに相成候
 て不苦事と存候



南輕松收納の義よくハ不存候へ共津州にも四十万の田有之杯申南も餘程
 の様被存松も十万位は有之やうに被存候へハ何レ内存通りニ相成候て損
 ハ無之やう被存候故右書遣し申候内存故爲見申候よろしく加筆可有之候
 事全一覽のみ

明日遣候と役所ニてさしつかへ可申と存候故今晚宅へ遣し申候

大南部二拾万石

小南部丹一万千石 在所記なし

同南部左衛門 二万石

在所奥州三戸郡戸八

大津輕拾万石居城弘前

小津輕左近 一万石

在所黒石

表向高三十四万石

此方高并連枝を入れて

三十五万石

二万石

二万石

一万石

〆 四十万石

二五 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」(推)天保年間

書附

之品

藤田虎之助へ

昨日加州より別紙の如く申來候へとも其つまる處ハ推察いたし候ニ是迄御助成と申も武公の御時よりハ莫大の義是迄の姿にてさへ不行届ニ其上非常ニ義申立たとへ御濟せニ相成候とも不模通指見え夫のミならず實ニ

海防へ心を用候ハ、猶以勝手悪敷可相成又表向のミの申立にてハ御濟せに相成候かとも空敷相成我等か徳義迄ニも拘り可申候さすれば半云々と申候ハ□ニ永續ハ土地ニも可相成歟夫さへ不容易と申様の書取ニ見え扱々残念ニハ候へ共成程是迄 公邊より被下等取調候へハ夥敷事にて一言の申開も無之候へ共勝手の義ニ付て申候ハ、是迄の通りにてハ小祿の事故いつとても願ハ不絶事を申立候より外無之又北の義ニ候ハ、甚吾へ遣候趣にて昨の義認候も可然哉昨日の中へハ先ツ扣候へ共本より北を切開候ニハ罰人にて年々打首等又ハ追放遠島等被仰付候人を松前へ被遣我等か下知にて右の者へも土地開せ又ハ蝦夷人等ニも開かせ候様ニ無之ては開け申間敷右様相成候へハ人命を御救被遊候御一仁ニも相成但し大罪ハニて可然事先日無用の人を減し且ハ北國を開き海岸を手厚ニ御備被遊候一條有用の米を貯の處へも當り申候ニ可有之□□人ハ何レ加州々之文面にて昨日認爲見候處をも照し合せ加州にてもなる程右様の工風に候ハ、行届模通り可申と存候様ニ認め甚吾

へ渡爲見度事ニ候何レ罪人を彼地へ御遣被遊候義杯ハ非常の義ニ候へハ非常の願御濟せ被遊候からは非常の義無之ては出来不申義ニ可有之又北ハ何レニも出来兼候と申義ニ候ハ、鹿島行方十六島アソウ佐原銚子杯と是も打明候て申候てハ如何可有之哉加州より半と申候義ハ前にも申候通□□を土地ニいたし候心得と見え候處土地ニ相成候へハ雜費もかゝり候故永續ニて一万の物ニ候へハ今一万三千計も無之候てハ不相成鹿島等右申候ケ所ニてハ大方金ニつもり二万三四千と被存候何レ加州の文一覽候ては昨日のまゝにては不相成候故猶亦爲見申候加州書ハ一覽畢候ハ、戸田より成とも直ニ奥へ成とも返可申候

二白一度ケ様申遣候からハ海防の申立ニもせよ勝手の申立ニもせよ是非二策の内ニて申不落してハ不相成尤甚吾も此義ニおてハ只□□同心にて張込居猶亦加州無之節ニ致候ては逆も六ケ敷事故是非申落度事ニ候處先日銚子の義申遣候上ハ勝手の義ニ付ても銚子の事無之ハ相當い

たし申間敷歟又勝手の義ニ付申候からハ銚子ハ入不申候とも近國の事故加州申候通り此方ニて非常の節は出張ニも可相成哉先ツ何レ北を追々ニ申談付其跡へ無已ハ南の義を申遣候ても可然哉何レ加州の書一覽可致候早々火中くくく

又今朝も考候ニ□□ハ永ノ一のミを南ニて土地ニ直して計の心得の様ニ候へ共勝手向の義申立候からハ全く一か土地ニ成候てハ雜費ニかゝり先ツハ損ニ相成昨年の作杯にてハ猶々公義ニて一度永永と被仰出候からハ御取上にハ不相成事指見えニ候へハ全く永計土ニ相成候なれハ加州ニ無之ても行々ハ出来可申候へハ是等の處も有のまゝニ甚吾の書面へ申遣候方と存候何レ今ハ海防の義より公邊ニても御勝手へ拘り候義ニ存候へハ北の方なれハ公義の御入用ニ不拘候故申落しよき様ニ存候南なれハ昨夜も認候通り二万兩餘にも相成程ニ無之てハ勝手のおきなひにハ不

相成此永一有之候ても此節にて次第〱ニ窮迫なれハ右か土地ニ相成候迄にてハ表向難有のミニて内ハ餘程難義ニも可相成何レ北の義ハ松ニ不拘とハ加へ申遣候へとも五十日立候てハ六ヶ敷有之候故早々一覽ノ上認候て見せ可申候

一北手ニ入候て永續御引上ニ相成候へハ上ノ御益と云處より續て昨日の趣も可認事

一我等了簡にてハ北を添地ニ給り候へハ家中も四ヶ一ハ彼地へ引ケ又家中の二男三男等も彼地へ遣候より下々迄右ニ趣ニいたし候へハ員子も自らはけ道有之故行届可申しはらく悪風絶候ハ、終相止可申家中水府ニ減候へハ北ノ人別ハ北の納收にてまかなるニ可相成哉と存候其上ニハ別紙ニ認候通り願候て罰人等にて切開セ候ハ、行々開ケ可申哉一笑ニ相成候ともまゝ加州へ打明ケ甚吾へ書取て爲見候ハ、何と可申哉猶

亦工風之上認可申候加州も學者風にてハ不好様ニ存候故宜敷考可申候

二六 徳川齊昭書付「安食七兵衛等宛」(推)天保年間

「中納言様

御直書

大砲吹場焼失新規御出来之儀

去廿一日夜大炮所焼失のよし日々是迄大火を起し申候所數ヶ年出火も無之段ハ是迄皆々格別ニ心を付候故と存候とくにも焼可申をよくハ只今迄持候事ニ候其上細工等も我等とり候節見候にも大敗ニ有之候へハよき序新ニ都合よく立候がよろしく候扱夫ニ付候てハ定て金子ニ指支申候半と察申候處卯年拜領いたし候黄金百枚手を付不申さし置申候能登守又ハ彌太郎等へ申聞候て黄金相場一枚ニ付廿五兩位ニ候へハ元金方へ成又ハ役金方へ成前文黄金を廻し候て廿五兩の相場を以小判と引かへ直ニ細工所

普請致候様ニと存候出来上り候筒ハたとへ屋根落かぶさり候ても何等次第有之間敷候へ共鐵張筒の方ハ臺車等ハ勿論焼失致候半か筒ハ如何用ニ立可申哉否何とも安心不致候鑄筒ニ致し細工所ニ有之分ハ何等次第有之間敷察申候只十二支十千の筒を案し申候又細工所門の外畑へ一軒立是へ本藥箱等指置申候處如何相成申候哉是又案し申候若々焼失不致候ハ、元藥箱ハ本城星ノ筒を入置候板藏へ遣し申度候但シ此節政治郎引居申候へハ七兵衛立合ニて入可申依て藏の封印遣し其外細工道具等不用ニ相成候品も可有之候へ共柄杯を付かへ申候ハ、大方ハ用ニ立可申と存候只々前文の鐵張筒殘念ニ有之候前文ニ通早ク跡普請ニ取かゝり道具等の手入も直ニ致し候て又々早く取初ニ可致候扱實自火ニ可有之哉又付火ニハ無之哉細工所と有之候へ共我等考候てハ長屋の方と存候定めて是迄の帳も焼候事か杯と存候何レの道早々跡取かゝり候やう可致金子ニ指支候事と存候故此だん申聞候故能州張太郎へ申聞候て右様扱可申候事

尙々百枚の黄金少々引わけ候も殘念故一度ニ此度小判ニ成何ニ成引かへ候がよろしく候依此だん宿次を以申聞候也

五月廿五日

七 兵衛
仁 左衛門

尙々焼失の品ハ夫々認申候て兵衛門より見セ候事と存候又地金少も不
失不致やう可申付候也

二七 徳川齊昭書付

〔安食七兵衛宛〕(推)天保年間

「プロインステイン」之儀

御筆

午二月六日御下

ブリユインステイン拾包仁

壹包正味八合五勺五才宛壹合と申ハ拾六
勺ニ事ニ御座候

徳川齊昭親書 (天保)

右ハ先年長崎へ申遣置候處此度^{越脱カ}差候處何の藥ニ相成候へきか失念致候故承り申候

一切類へ墨其外の色付候を堅魚節ニて落し候かに咄承り申候處堅魚節のミニては落申間敷何ぞ外ニ入れ申候哉序ニ承り申候
一疊へ墨の付候を洗申候へハ墨付候處自ら黒く相成候處墨の付候を其まゝニ致し干候てよく干候節ニ火鉢の灰をふりかけ摺候へハよく落申候
二三年先ニ付候もよく落一切分り不申候是ハ風と試候故申聞候ためし可申候

右ハ序節松延定雄へ可申聞候

一前文藥ハ俊齋の書面にも有之候處勞症ニ藥ニ相成候哉渡りの少き品ニも可有之哉勞症ニ外又何ぞ用ニ立候品ニ可有之哉承り申候何年貯置候て惡敷不相成品か是亦承り申候故承り候て可申聞候

書附
之品

七 兵 衛 八

二八 德川齊昭書付 (推) 天保年間

十一月廿八日御下ケ

御筆

添地の義近々十五万石と申候處 公邊御役人ハ勿論此方ニても大過可申と存候半か諺にさへ棒程ニて針程も叶と申候へハ兎角理合に叶候程にハ大ク申置度事ニ候此度の進達へも右御六ヶ敷き御模様ニも御座候ハ、全く自由か間敷ハ御座候へ共尾紀兩家へ引續き云々と申立候事ニて實ハ尾紀へ引續き候ニハ十五六石と申入も少き事ニ候へハ其心得ニて可談候

只今の處ハ甚肝要故北出來候ても五六ヶ年の内ハ 公邊より御助成等ニても無之候てハ云々と申事杯一切申間敷何レの道北地の出來候處專一なり如才ハ無之候へ共爲念申置候也今日か明日の内雁ニても

相合候へハ添物にいたし候心得ニ候處万一無之節ハミそつけ鯛にて
 も用意いたし可然江戸にて仕込候様にてハ厚相成申間敷候依申聞候
 一越にて万一北御出来ニも相成候か又ハ外々にて御添地相濟候ハ、勿論
 永續等御引上ニ可相成杯申候ハ、被下候收納次第ニ無之てハ名實相違
 甲乙故云々と可申尤左やうの事ハ 公邊ニても致間敷候へ共爲念申候
 又北相整候とても彼地ならしの□候^{不明}までハ御引上ニてハさしつかへ候
 義可申置候いつ迄も永續等も是迄の上にて土地をも好候やうにてハ越
 等も張込も如何故先右様可申候

二九 徳川齊昭書付（推）天保年間

「親批 一通」

別紙ハ大久保在役中申遣候書通に候處大久保も泉客と相成今ハ誰へ可達
 當も無之残念ニ存候故先年大久保への書通の下書内々爲見申候て川路の

覽意承り申度候追々承知の通り永續金一万年々五千金積金等有之てさへ
 中々取續キ兼申候一骨折後ニも尾紀と違土地無之候へハ骨折も不相成候
 へハ志摩を可然土地へ御移しニ相成松前を飛領ニ頂戴いたし候ハ、永續
 金等此上五ヶ年十ヶ年も立候ハ、必ス御引上ニてもけつして指支ハ不致
 念ニ有之候處川路了簡ニて我等願も出し候ハ、出来可申哉と存候ハ、其
 内越州杯へ願出し可申と存候尤我等此地ニ居候てハ中々不行届候へハ右
 様ニも相成候へハ隠居同様ニ相成松前へ引移り居候て万端世話いたし候
 心得ニ候人さへ多有之候へハ必ス地ハ開キ申候故輕キ罪人等ハ不殘松前
 へ被下ニ致度御仁惠の一端ニ相成候上万々一微力ニて土地も開候へハ日
 本の爲幸此事と存候依内々かしく

三〇 徳川齊昭書付（推）天保年間

「御筆 御代々御夫人様院號御止メ之儀
 加州へ御文通案竝岩舟額字之儀」

徳川齊昭親書（天保）

一先年より代々の者院號と申ハ無之威公義公と申
公邊へ申達候書附等へハ源威源義と申
公邊よりハ源威殿源義殿と申振ニ御認ニ相成候然ル處簾中方の義ハ内
々ニては何々夫人と申候へ共
公邊等へハ院號ニて用來候故
公邊よりも院號ニて是迄御認ニ相成候處代々ニハ院號となへ不申簾中
ハ院號ヲ申候様ニてハ相當不存事故家督の砌申出院號相止候様致度候
處先年より用來候義ニて改候義成兼候よし奥右筆より沙汰も有之候上
ハ又々申候義も如何敷候へとも家督の砌は可頼人執政ニ無之候處只今
と相成候てハ足下へ何事も無遠慮打明し御相談申候様相成候へハ右の
義も御相談申度序故甚五口上覺書を以御咄申候右の通りニ相成候へハ
是迄 公邊向原威の妾ハ久昌院と申内々ニてハ靖定夫人となへ源義
の簾中ハ 公邊向法光院と申内々ニてハ哀文夫人と申候處代々の者も

源威源義と認候上ハ簾中も靖定哀文と 公邊向へもとなへ申度又 公
邊よりも靖定殿哀文殿と御認ニ相成候逆何も御故障の譯も有之間敷哉
と一通りニてハ致候處如何致候者か内々御相談申進候事

何月何日

二白當主了簡ニて院號をかへ又ハ忌日等も指合有之候へハ外日ニ相定メ
候義も有之候へハ是迄法光と申候を哀文と改候様致候ても是亦御故障も
有之間敷哉の事

右の趣ニて序の節甚五より加州へ承候てハ如何可有之哉の事

一先日岩舟の額字ニ最初追遠の字撰爲見候處右は御廟門へ額ニ致候てハ
如何可有之哉 公邊ニてハ 勅額ヲ御かけ被遊候へハ 仙洞へ相頼候
てハ如何と存候處 公邊ニて 勅額御用ニ相成候義も若々實ハ非禮ニ

當り可申哉若左様ならハ拙筆ニて認可申とも存候へ共如何致候者ニ可有之哉

正月廿日

彪

三一 徳川齊昭書付(推)天保年間

御筆 癸丑甲寅

別書

蘭書等統て横文字の書物ハ一説ハ一切持渡り候義御禁制ニ相成候へハ只今ハ未蘭書發明いたし候者ハ多無之候故追々蘭學も衰へ可申扱又夷人逆風等ニ逢何レの浦々へ着候とも以來ハ通便の者扱不被遣候就ハ御代官私領ハ領主地頭ニて召捕次第直ニ無二無三ニ殺し一日たりとも本朝ニ地ニ夷人を飼置候義不致様致度事ニ候なまなか通辯扱有之候故たとへ間者ニ參候ても薪水ニ指支候とか又ハ逆風ニ逢無據とか何か夫相應の事申事ニ

候故無二無三ニ夷人ハ召捕次第打殺候とも又ハ切捨候とも禽獸同様ニ候へハ但シ領主地主ニて形罪不行方ハ公邊さ不苦事ニ候若近寄候ても其まゝさし置候か又ハ召捕候上ニてにかし候事扱相聞候ハ、其領主掛り候役人迄然と被仰付候ハ、相届可申歟右様相成候ハ、此方より彼地へ飄着扱有之候節も同様打殺扱可致候へ共なまなか横文字又ハ邪宗門扱學過候よりは百人や二百人ハ人は惜事無之様被存候兎角夷人の言並ニ文字不相成様ニいたし度事ニ候相分り候事故愚夫ハ十字佛を難有思ひ候事又ハ着岸の義尤ニ聞え申候故何も不存前ニ申候通無二無三ニ近寄候ハ、大筒ニて打拂上陸致候ハ、召捕申候の是非承り候ニ不及直ニ打ニ打殺し申度事也是ハ別書ニ致候亦も過刻の處へ入候ても何レニも

三二 徳川齊昭書付(戸田銀次郎宛)推天保年間

御筆

九月七日朝御下

書附之品

戸田銀次郎へ

本文之内カムサツカ邊へ繫船漂民ヲ陸上ニ揚候て云々案ニ右ニてハ何レの地へ漂民を上ケ候か不相分候へ共全認方不宜ニて子モロ邊蝦夷地へ漂民ヲ上ケ來春來り候義を約束してカンサツカの邊へ往申候云々の誤なるべし

一鄂虜實ハ云々の義實否ハ勿論不相分候へ共多分此度送り來り候ニ付てハ交易の義申込候ほか又例の姑息なる答ニて一寸のかれ致候計故來四五月ハ必蝦夷騒き起り可申ハ無疑候處實ニ如本文直ニ江戸へ可來申候事ニ候ハ、一度北地へ來り其節の挨拶ニより申候てハ直ニ浦賀へ來り候も難計又浦賀ニてよくふせぎ候ハ、其余毒此邊へ來り候も難計候へハ過刻夫々へ達候義薄々よりもチト心を持セ達可然候本文一覽終候ハ、藤虎吉又等へも爲見追て虎より返し可申候

鶉平結寅等へハ本書を寫し戸田へ出仕の節爲見可申候依極密申聞候事又曰是迄數度姑息の挨拶ニてたまされ申候へハ此度杯ハ手つよく押來候も難計事

奉裁寸楮候殘炎又々立返申候愈御健勝奉賀候過日魯西亞人之事荒増得貴意處漸昨日實說承申候間申上候得共間宮林直話一體エトロフ邊へ漂民護送候處海岸防禦候様子窺窺直ニ引返カムサツカ邊へ繫船漂民ヲ陸上へ揚候何れ返事ハ來年承可申との契約致候出帆と申事ニ御座候格別深入も不致さつと開申候由ニ及承申候漂民とも過日御呼出ニ相成其節連枝家老松前内藏用人蛸崎四郎左衛門郡宰兩人壹人は失念薄田内藏と申者都合四人 幕府へ罷出當時御糺明有之候由全實說ニ鄂虜實ハ江戸へ直に出候心得之處是ハ松前之方へ指留申候由及承申候先間宮林藏申處實說と右承申候其餘府下異聞も有之候處更ニ區別信用難致候尙餘は

追々可申上候今日拂曉より暴風類橋修復之世話ニ取懸其内當直刻限ニ指懸申候間草々閣筆

九月卅日

宣

明

再拜

定雄大人

参ル

尙々金谷へ御逢候時宜致聲奉希

三三 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」(推)天保年間

書附

之品

彪

一 態々宿次を以申越候ハ明十九日便ニ間ニ合候やうニとの義ニ可有之存候故只今偕樂園より歸り一覽直ニ返書認申候

一 丙丁云々の義を初總て申聞尤ニ有之依てハ丙丁も作刀も献上ニ不及と存此方ハ一切不申先ハ獻候様ニとの仕方ハ下リ前定ニ親見へ出候半其セツ 御大政も追々御改正ニ相成候段水戸殿ニても恐悦ニ被存候云々

杯より咄を移し貯穀御達も近く出申候處定て水戸殿承知も被致候ハ、難有被存候半兼て凶荒兵亂異船等の義深く 上の御爲を被存日夜心配被致既ニ去ル甲年^{脱カ}に兩丁龜鑑様の者も申付被集候へ共御程合も不相分故不被指上候處只今御改革等ニてハ御役々も存付候義御達まで出候へハ被伺候ハ、如何様ニか難有可被奉存一體先年献上被致度被存候へ共其以前拙作之刀御慰ニ奥ハ被獻候處小刀挾杯の外外々より上り候ハ不^宜 上ニてもあまり御好不被遊品故万^一御不都合ニ相成候ては不^宜と土岐殿被申候處水戸殿承り畢竟長々部屋住ニ被有之候故色々^の卑きわざもいたし候故終ケ様の物もさし出し候處茶碗茶七鑄物杯總て昔し貴人もいたし候へ共不致候てよろしき義故如何様控へ候方可然しかし土岐殿ニて 上ニてハ刀劔様の物御好不被遊との言葉ハチト如何杯と度々被申候右様御程合も不相分候故丙丁龜鑑までもさし上候義何かとあやふみ候へキ杯申位ニ申候ハ、先よりも夫ニ付何とか出可申候故其顔

色口氣ニよりて申候方可然と存候尤臨機應變故ケ様と此方よりハ指圖
 ハいたし兼候へ共多分ハ丙丁龜鑑ハ越州よりも先日さし上候へハ御遠
 慮ニ不及御作刀の義も 勅作等も有之事故御さし上可被成當 上様ニ
 てハ至て右様の品御好ミ被遊候故御上ケニも相成候ハ、御檢も定て可
 被 仰付候故何分御出來のよろしきを御さし上可被成杯申ニは相違無
 之土岐と引かへ御挨拶ニ必ス相成可申哉ニ被察候
 一茶碗鏡等の義ハ新見へ申ニ不及是は出來次第御守殿杯さし上候てよ
 ろしく候

今日ハ久々ニて素足ニて借樂へ歩行いたし候是も幼年々牧そだち故か
 右やう致し歸り候處足もほとをり甚よろしく覺申候是まで醫師共ニ留
 られあたゝめ候處却て冷へ候へキか昨日城の廻りを無沓ニて水溜りへ
 足を入ひやしゝあゆミ候處昨夜ハ甚よろしく候故今日も右の通りい

たし申候最初よりケ様致候へハよろしくとハ存候へ其人々押へ中々出
 來兼申候所あまりいつ迄も同様故古法家をいたし申候追々よろしく案
 し申間敷候也

十月十八日

彪へ

三四 徳川齊昭書付〔老中宛〕 弘化元年五月五日

〔御親書 甲辰端午閣老へ御贈書案〕

書附之品

銀次郎
虎之助へ

三家之義ハ乍恐
 將軍家御兄弟の家ニて且拙家初代源威事

徳川齊昭親書 (弘化元年五月)

大獻公より難有 尊慮有之誓紙をも指上御内々御書をも頂戴いたし居候へハ代々右々心得にて非常之節ハ御旗本の下知も致候心得にて即々御上容の節も此方家ニ限り一万四千人々數召連矢玉等も進來迄京地へ數多あつけ置候位ニ候へハいつとても同様の心得ニハ候へ共まして拙者事ハ御守殿を母とし恐多も御臺様御妹を妻といたし候へハ 公邊ハ御疑をかけ候義も無之と存乍困窮行届候だけハ武□□御普代大名御旗本の手元本カニも相成候やうニと相心かけ尙又兼て北地の義等も建白致し居り候處此度無本人杯の如く七ヶ條の御疑心をかけ候上ハ北地領分ニ不相成義幸と奉存候位ニ御座候 公邊と三家三卿御普請御旗本等ハ常ニ水魚の如くニ無之候てハ決して不相成事ニて鎌倉杯の執政方丈北條の爲ニ本家連枝の疑心を生し候より終ニ方丈ニ奪レ申候へキ此度の御用召の義不調法の拙者ニ有之候へハ如何様被仰付候とも御かトニて被仰付候義ハ毛頭御うらみ御み□□候へ共 上へ對し無本人の如く御疑を

受候てハ於拙家一切不相濟候故申上候者拜領仕度奉存候老中の心得并下拙家老共心得とも兎角 公邊の三家并御普代等まで御疑ニて中割レ無之やう致候事肝要と奉存候故私惡敷かどハ如何様ニも被仰付候とも御疑ハ無之やう仕度實ニ私ニ候へハこそ御疑心の義ハ承り候ても罷出候へ其人ニより候てハ恐懼ニ不堪候へハ毛頭無本の心無之者も御疑心の爲ニ惡敷相成候義も可有之候風聞承り候者ハかるき者ニ候へハ見聞候毎に可申出候得共又其上之所ハ何分御了簡ニ仕度奸僧杯ハ尙更の事ニ有之候 御用召ニつき罷登り相慎ミ居と申なから恐をもかへり見す各方迄御内々申進候也

以下東湖の案文
 薄暑之節何れも愈無御障欣喜之至ニ候陳者在邑中にハ候へ共御用も有之候間一旦參府之儀被仰出候付去ル二日發途旅中無異今日着府致候扱先頃中山備後守へ七ヶ條御尋有之趣其砌書面ニ申來尙又今日

同人々具ニ承之候處申迄ハ無之候へ共當家之儀初代源威事別大
猷院様御懇命三家一統とハ乍申を代々篤く申傳も有之處右様御疑ケ間敷御尋
有之様ニテハ年來の赤心も無ニ相成何共殘念之至ニ候以下二行烈公筆方々にも御疑
をうけ候様の心得の先ニ候ハ、土地方等年來内願ハ致し申間敷右ニ
ても御推察可給候

尤踈漏之性質ゆへ在邑中政事向等諸事過不及有之儀ハ自分にてさへ
心配いたし候程ゆへ外々にてハ如何様の風説申ふらし候も難計其風
説御聞捨にも難相成候備後守へ御尋に相成候事ニ候ハ、尤に候へ
共萬一足下御一同迄少々たりとも御疑ひ上御披露ニ相成様にてハ
扱く迷惑いたし候此度御用之品ハ難奉計候處外々之事にて被 仰
付候儀ハ何如様被

仰付候共兎角可申様無之候へ共赤心ニ無之段御疑有之候様にてハ源
威始代々篤く申傳候廉へも相當不致遺憾至極に候間慎中なから難默

止此段不取敢申進候也

端午

三五 德川齊昭書付「海野泉藏等宛」 弘化元年七月十二日

「辰七月十六日江戸々着

御筆御下古銅御買入之儀

書附之品

海野泉藏
安飯七兵衛

イキリス船數百艘ジャガタラへ來り夫々肥前へ着岩追々着船の上願事有
之由但シ公邊御政事向の事ニ付申上度由肥前守并黒田等より日却を以申上け
候よし愚考ニハ多分交易願ニテ御濟セ無之節ハと存候數百艘用意致候事
と存候先ツハおどかしにて交易を此度ハ濟セ候心中と被存候扱夫ハとも
あれ右やうの事有之上ハ又々銅の直も必ス上り可申候處古銅買入之義追

々申置候へきか我等此度ケ様ニ相成候とても夫切ニ相成候ては不相成候
 故吉成等へもかけ合是非ノ二万貫ハ手早く買入置申度必ス此度ニ義ニ
 付てハ又々引上り可申と存候江戸の義ハ御焼失ニて定ホ引上候事と存候
 へ其他國々へ手を廻し可然存候依申聞候也
 一大銅細工場ニ義普請等初り候迄ハ控候やう申置候處普請方等初り候ハ
 、やはり初候て可然存候尙又玉を鑄候事も他人入不申國中の人ニて相成
 事に候ハ、只今初候とても鐵鉋師か鐵鉋拵弓師か弓を製し候も同様の事
 故一應兩老へ申聞候上ニて初させ可然候反叛ニ無之と申義ハ 公邊初世
 間ニても承知致候半故取かけ候て不苦存候事

七月十二日

尙々古銅買方の義町人共買入候ふりニ候ハ、いつにても次第有之間敷
 候金郷一万五千金ニ義吉成等約束ニ相違不致候やう申聞度候事

泉 藏

七 兵 衛

三六 徳川齊昭書付〔金加役宛〕 弘化元年九月朔日

〔御筆入〕

辰九月朔日着御下

書附之品

水戸

金 加 役 へ

先日直衛門作義通ニ兜ニ寫一覽尙又此度恒次郎作兜類登セ候ニ付一覽い
 たし候所恒次郎義も手際よろしく扱ノ感心いたし候依てハ過日直衛門
 へ遣し候位ハ恒次郎へも勵ニ爲遣し候やう片落ニてハ不宜候故同様ニ扱
 可申候尙兩人とも引立の義ハ薄々筋へも咄し置候へハ矢倉奉行へも内々
 咄し置可申候直衛門恒次郎等の者追々出来申候義國の一ツの寶ニ有之候
 へハ此上何分兩人共骨折候やう可申聞候恒次郎直衛門等へは我等兜類形

ニ見度と申候者へハ爲見候がよろしく尤我等品ハ大切ニいたし錆等落不申やう致し見候やう可申付候瓦屋の方ハ頼并兜下ハ素バチニいたし等所へ下ケ候て爲見候ても不苦候

一此度恒次郎張申候兜其形實ニ義通と見え申候只々非を申候へハ右作ニはならし槌之跡無之銀の穴の處此度之如くきたなく無之候又銀と付合候所無之外ハ見候所銀之所へこミ不申候惡敷所をえり出し申候處が右位ニて其外此所惡敷と申所無之候扱又兜之色頼の色の如く候ハ、尙よろしく可有之追々ニハ甲肉付候ても出来可申候
一頼ハ統てよろしく何一ツ此所惡敷と申所無之候追々ハハヤスリも出来候事と存候實ニ兩人とも義通高義再來とも可申程ニ可相成と雀躍いたし候當人にも此だん内々可申聞候事

九月

水戸

金加役共へ

尙々頼の義我等用ニ候ハ、指止候やうニとの事ニ候處右之手ニてハ此上如何程ニか上達可致と存候へハ此度のハ好人の方へうり候やう可申候我等兼々宗吉親の代ハ半頼申付置候所宗吉方ニて出来兼候か又ハ手透なくは右恒次郎等へ申付候てよろしく候頼ハ家忠の□如此頼也十申付候の之尤急く品ニハ無之各々の甲冑へ付置候心得也子年以前ハ申付置候の也

御用御鷹掛

水戸御金加役

駒込御小姓頭取様

御同役共

以書付致啓上候然ハ瓦屋御細工所御職人飛田直衛門此度初ハ六十二間製作之兜之由指出候間爲差登申候職方之者へ吟味爲致候得ハ彼是申分之所も有之由ニ候得共初ハ之製作ニハ感心之事御座候以來職分出精勵之爲ニも罷成候間可相成ハ御なくさみニ入

高覽申度被存候宜敷御扱可被仰付候尤 高覽相濟候ハ、追テ御指下可
被下候此度得御意候以上

八月廿四日

尙々此度の品も内外塗申候へハ随分義通と見あやまり候程ニ有之候
令披閱候職人飛田直衛門初て六十二間之鉢を鍛候よしにて指登セ一覽致
候處さて、感心の事ニ候初てニても如此細工出来候上ハ追々ハ如何様
上達致候も難計段々様様の者多く相成候義國の寶ニ有之候へハ内々手元
より褒美として一兩も遣し尙此上勵ミ候やう可申付候
一鉢をかへし打試申候ニ響も随分よろしく一枚かねの様ニ響キ候へハ
りもよろしくと存候へ共尙此後心得候やう可申聞候
一鉢之内眞甲ニ早乙女鋳を打申候處此度出来候形ハ義通の形ニ有之候所
義通ニ早乙女鋳有之候哉一寸失念故申聞候若しなくハ無き方可然

一鉢之内ノ鋳頭初とハ乍申甚拙ク有之候思ふニ義通信家とても打バナシ
ニて鋳頭きれぬニ可參筈無之候へハろくろぎりの先へくぼミたる菊座
の如くきザミ有之きりニてすり候ハ、鋳毎ニ手際能まへり可申と存候
一追々ニハ瓦の如く重ノ間ニすき候やうニも出来可申候義通ニ作ハ多分
響の穴より上下へわらミボ等通り申候へハ是等も心掛候やう可申聞候
何レニも初ての細工ニは別て感心いたし候依品を返し此だん申聞候也

三七 徳川齊昭書付 (推) 弘化元年

「御筆

辰十月」

一五郎七郎七才の節より追高狩ニ出候故陣羽織等拵サセ遣し候處當年八
郎九郎六才故來追高狩ニハ出し候心得の處未陣羽織拵不遣候故八郎へ
ハ當年卯花威小手ニいたし候切残り居候半故右ニて拵サセ九郎の義其

方ニ可然品無之候ハ、此方より取寄候て拵可申候
一太刀杯も五郎七郎同様ニ用人へ申聞候やう可致候
右陣羽織の義ハ此前市平ニて割合申付候へハ市平へ可申聞候其外帽子笠
等は五七之節出来候振ニて扱せ可申候兄弟共遣し候者と遣し不申者と有
之候ては不宜候故同様ニいたし可申候

三八 徳川齊昭書付 弘化二年八月二十六日

「御矢倉方硫黄之儀ニ付

御筆 弘化二年八月廿六日御下」

本文硫黄ハ國許を出不申品故非常之節本山の方ニて留申候へは此方ニ大
筒のミ有之ても棒ニハおとり申候故今の内二千金分買置申度申候所戸田
ニて先ツ千金分と申候故千金分ニて買入申候處右硫黄買入後 公邊ニて
も御買入ニ相成候付外出しを留ニ相成候處前文ハ此方先口ニ申込約束出

來候へハ千金分ハ買入に相成申候へキ川岸の藏へ入置加役封印の筈かと
存申候扱只今硫黄直次前同様ニ候ハ、矢倉の分ハ政府へ申出候て買入製
候方可然又あまり高直ニ候ハ、元直段ニて失倉へ拂ひ右金ハ全く硫黄と
引かへ硫黄の心ニて遣ひ不申指置此後硫黄下直の處を見候て又々買入候
方可然候有物を矢倉へ遣し候ハ易く候へ共異船の騒等有之候へハ必ス鉛
も硫黄も硝石も引上り候故何分今の内ハ外ニて買上外ニて買候事不相成
節ニ手元の品ハ出し申度事也

三九 徳川齊昭書付 弘化二年九月二日

「硫黄之義 弘化二年己九月二日御下

御筆」

硫黄之義先便申聞候所又々矢倉奉行を申出候よしニて手元貯の品々致置
候故つき申度との義兼て申候通り燐硝ハ非常の節城内を初家中の屋の下

徳川齊昭親書（弘化二年九月）

を取候ても出来灰も結から又ハこうつ其外疊表を焼候ても何ニても出来
 善悪ハ格別國中ニて不出来事ハ無之候へ共鉛と硫黄ハ國々出候事無之候
 前文の通り貯候上ハ合薬ニ致度ハ勿論ニ候へ共手元ニて右様致候故政府
 ニてもまけずニ手當致候と申腹ニ候へハ何分ニも合薬ニ致度ハ勿論ニ候
 へ共手元ニて骨折候へハ夫をたのミに政府ニては尙々怠り候義常平倉等
 をあてニ致し候同様ニてさて、こまり申候手元ニて買入可申と申節ハ
 彼是六ヶ敷又買入候上ハ夫ハ目をつけ候て政府ニてハかまゐる不申工夫の
 ミ故硫黄も合薬ニハ致し度無之候へ共如何様一ツの水車ニてハ年數もか
 かり且又手元貯ニて加役共封印ニ致し矢倉へ預ケ置候事ニ候へハ生燭硝
 又ハ硫黄等預ケ置候も同様之事ニ候へハ春セ可申候乍然右ハ全く外物ニ
 て政府へハ一切無之ふリニ致度候此だん急と手代共へも申付候て全く別
 物隠密品ニ可致候也

水戸加役へ

四〇 德川齊昭書付

弘化四年四月廿九日

極いそき認候間御推覽奉願候

六月朔日於御座間之上意書琉球國へ異船渡來之處彼地之儀ハ素々其方一
 手之進退ニ委任之事故此度之儀も存寄一杯ニ取計尤國體を不失様寛猛之
 所置勘辨之上何レニも後患無之様及懇慮取締向等機變ニ應し御取計可申
 候事

勢州廿七日大隅ニ内慮之寫

原朱書烈公評語
 「案ニ寛ハ實ニして猛ハ付字と見へたり云々」

琉球國へ異國船渡來候義ニ付不取敢家老之内國許へ差下し重而之模様ニ
 寄り其方ニも御暇可被相願との趣被申聞候へ共今般之義は不容易次第に
 て事柄ニ寄候ハ御國體ニも拘り可申程之儀ニ付其方早速暇可相願筈
 候へ共彼地之模様次第於當地伺其方取計之品も可有之候間嫡子修理大夫

御暇被相願早速國許へ相越諸事之取計并取締向等應機變不失御國威於寛猛之場程合能熟慮指麾有之方存候事

修理大夫出立前日阿部宅へ呼口上にて申達候趣

此度於御座之間被仰出候通 公邊之御都合無懸念存寄一杯ニ取計候様且又此度は別々之儀にて御坐候故御役人同様ニ 思召にて御委任相成候事故差掛り之義ハ如何様も 御國體不失様宜敷所置可致趣且琉球は外地之事ニ候間日本地方とは違候條様子ニ依りてハ成丈手細ニ交易取結候様無之ハ相濟間敷此儀表向宜敷トハ不被 仰出候へ共御委任之事故夫等之義應機變取計様 明日出立之義故右之段内達いたし候右之外細事色

以下原朱書烈公加筆

先ッ如此の有様ニ成行此方ハ招候も同様夷狄の申ニ任せ交易を結ひ

候て防禦をも不致ハ國威を不失ニ可有之哉又後患なき爲ニ可有之哉又表向宜敷トハ仰出難程の大禁を内々にて致候て宜と申も如何いたし候ものか昨年來は夷狄共中山王城の近邊迄來り測量いたし候へ共

留候事か不相成よし申出ニあり尙又近く承り候へハ薩にて琉國へ商館を立て交易始り可申とのよし如何ニも恐入たる事にて遠慮無之時之水火大地震等蓄害並至るも左も可有之事之
前文之儀極密故我等ハ聞候杯トハ懸意の人へも一切申間敷候

四月廿九日夜燈下落字も可有之推讀可致候

四一 徳川齊昭書付

嘉永二年五月廿四日

己酉五月廿四日

得と拜見候上存分可申上候

武家諸法度

- 一 尊宗神州之道可退異端之道事
- 一 文武忠孝を勵し可正禮義事
- 一 參勤交替之儀每歲可守所定之時節從者と員數不可及繁多事
- 一 人馬兵具等分限ニ應し可相嗜事并調練等不可怠事

- 一新規之城郭構營堅禁止之居城之望壘石壁等破壊之時ハ達奉行所可受指圖之櫓屏門以下は如先觀可修補事
- 一企新規結徒黨成誓約并私之關所新法之津留制禁之事
- 一江戸并何國ニても不慮之儀有之といふ共猥リニ不可懸集在國之輩は其所ヲ守り下知を可相待也何所ニ雖行刑罰後者之外不可出向可任檢使之左右事
- 一喧嘩口論可加謹慎私之諍論制禁之若無據子細有之ハ達奉行所可請其旨ヲ不依何事令荷擔者其咎本人ハおもかるべし并本主之障り有之もの不可相拘事附頭有之輩之百姓訴論者其支配ノ令談合可濟之有滯義ハ評定所へ差出之可請擱事
- 一國主城主壹万石以上近習并諸奉行諸物頭私不可結婚總事公事とお結縁邊は達奉行所受指圖事
- 一音信贈答嫁娶之規式或は饗應或は家宅營作等其外万事可用儉約總無益之道具を好不可致私之奢事

- 一役人へ贈賄者ハ取受たる者可爲同罰事
 - 一衣裳之品不可混亂白綾公卿以上白小袖諸大夫以上免許之事
 - 一附徒若黨之衣類は羽二重絹紬布木綿弓鐵匏之ものは紬布木綿其外ニ至りてハ万々木綿可用事
 - 一乘輿者一門之歷々國主城主壹万石以上并國持大名之息城主及侍從以上之嫡子或は年五拾以上許之醫師諸僧家は制外事無據者ハ許之醫師同斷僧家は本山のみ可許事
 - 一養子は同姓之相應之者を撰ひ若無之におゐてハ由緒を正し存生之内可致言上五拾以上之輩及未期往致養子吟味之上可立之緞雖實子筋目違たる儀不可相立事
 - 一知行之所務清廉ニ沙汰之國郡不可令衰弊道路驛馬橋舟等無斷絶可令往還事
- 附荷船之外大船は如先規停止之事

一私ニ外國ニ往來し或ハ私ニ放外交易ハ物之多少ニ不拘可爲嚴刑事
 一諸國散在之寺社領從古至于今所附來者不可取放勿論新地之寺社建立彌
 令停止之若無據子細有之ハ達奉行所可受指圖事

所附來者爲陰詞—共國主領主地頭之心次第不及取放勿論新地之寺社
 建立彌令停止云々

付伽藍等修覆之義成丈取縮村々の痛ニ不相成様扱可申事

一國々所々士民の子弟全體の者幼年ハ僧侶と致す事堅停止之廿才以上信
 心厚く宗法をとけ申度者ハ其國主領主地頭へ相達聞濟候上可爲僧侶候
 是迄幼年無心ニて爲僧侶後悔者ハ生國の主へ訴出歸俗致し人道相守り
 夫々職業申付國々に遊民無之様可致事

一是迄宗旨改申付置候處以來其義ニ不及氏子改可申事

一万事應^從江戸之法度於國々所々可遵行事
 右之條々堅可相守者之

天保九年二月廿一日

ケ様の趣ニて自減する仕方ニ候へハ自然と出家ハ減可申候本文へハ乘輿
 云々と認申候へ共やはり乘輿杯ハさし置候て目ニ見えぬ處ハ天下の僧減
 候様相成候ハ、可然存候ケ様ニも行々相成候ハ、天下の御爲と存候龍へ
 も極密問合候ハ、心付認させ追て爲見可申候

四二 德川齊昭書付

嘉永五年六月二日

「六月二日御下ケ常平ノ」

嘉永壬子 塙左五郎調御書案入

此度子^{くらぶ}シバより三冊并書取一卷指出し候處此度ハ返書不遣^{ない}ヲタ々々爲見
 申候扱上^{のうもみ}ヒヨタル不殘遣候^{たむば}ハカわいろに取候^かホエ程^にレタ相成不申
 と一笑致し候扱又舊年の挨拶もサシ^しベ書此間登^さラセ候故今ニ挨拶不致置
 候へハ一同ニ來月九日ニ認候て遣し可申存候^さソナクヨサシ^しベよて見候へ

ハ貯品ハ相違無之候へ共糶と米にてハ直違更米等余程之損ニ可相成候へ
ハ是等可申遣哉共存候依てソナクヨさごろうハ指出し候三冊相添下し候故直々四
日便ニ指登らせ尙否の義可申聞候

俄暑難凌候其地も同断と存候扱ハ舊冬調書指出候義受納と存候趣申聞則
其節申遣候と認申候たしかに落手致し但懷物去亥六月調書付札之内世話
糶三千貳百六拾八ノ年ア、亥暮ハ返納可成分レ有之所此分さへ納切候ハ、
皆納ニ相成候事と相見候然る所是迄之調書にて追々貸出し俵高と返納之
俵高指引候へハ三千四百貳拾貳俵此上返納無之候ハ元埋ニ成兼候様相
見え候何レ之指引違ニ候哉疑惑旁今日迄別段不申遣置候扱又常平の義ハ
非常の備なる義ハ各も承知にて則此度内密申聞候書中ニも相見え候處家
中の世話止候て糶買入難相成折柄如此糶米多貯にてハ直違更米等ニ余
程之損ニハ相成間敷哉奉行初如何心得候哉常平の義ハ年々ニ加し不申候

てハ不相成仕方勿論ニ候處奉行初扱候者の心得ニ寄益ニも損ニも相成候
義申迄ハ無之候へ共是亦序ニ申聞候

一嘉永五月常平亦懷物の調書尙又丹波ハ懸口之義ニ付答之趣等内密爲含
申聞候義何も承り申候其中家老共ハ申聞も可有之哉と相待候處今ニ何
等申聞も無之候故先ッ今日書付落手の證并前文疑惑致し居候分序ニ申
聞候之

六月九日

右之趣にて三日認遣し可申存候心付も有之候ハ、□□□□候て爲見可
申候
子シくらぶバハ出し候一とむ并ソナクヨさごろうの調書三冊下し申候四日便にて登セ
候様ニと存候尤何レニも間ニ合兼候ハ、九日ニはきつと登セ可申候

御前文云々

此度ハ常平并懷物調書指出申聞之件々令承知候帳末へ減過を付候義先
ツ調之通ニ亦も宜敷候得共已後ハ去年中申聞候通金穀共矢張正物ニテ
減過を付可申候扱金を穀ニ直不申候てハ減過も見積兼候との事尤ニハ
候得共貯穀ハ元々正穀之過候を專要と致候事ゆへ金ニ致ニ至候てハ其
詮無之況推量之相庭ヲ以穀ニ直候亦ハ有名無實之姿ニ候間とかく在物
ニ減過を見候方第一心得ニも相成貯穀之調ニハ當然と存候尤金を穀
ニ積り正穀と合併いたし指引候亦も付札位ハ可然候

一常平懷物共發端之調書舊冬指出候付途熟覽候所懷物之内世話粗之數
少數致疑惑候間當度之調を一覽之上と存其砌挨拶も不仕候處右疑惑と
申ハ□度調書付札之内粗三千貳百六十八俵亥々返納可成分と有之則此
度之書中ニも同様ニ候所前々之調ニ追々貸出し表高と返納之數指引
候へハ三千四百廿貳俵返納無之ハ元理ニ成兼候様相見何れ之違ニ候
哉少表之事ニハ候得共見通不宜候間否承度常平之方ハ手元控へ符合致

候得共若次第も有之候ハ、追々可承候

一常平之義ハ非常之備成事各も承知ニ而則此度内密申聞候書中にも相見
候處戌暮々去度迄粗貳万余扶持方ニ相渡米ニ而引取候ハ如何之扱振
ニ候哉是迄も一二ヶ月分之繰替ハ見へ候得共右之如く大俵繰替候事ハ
覺不申其上近頃世話粗買入も止候砌無作と粗ヲ拂出候ハ不策ニハ無之
候哉畢竟夫故米之方數千ニ及候處米ハ保ちも不宜若當度杯更ケ候亦も
生候亦ハ賣直へも拘又數千之捌ハ如何と存候尤夫等之踏へハ有之候亦
之扱とハ見候へ共直違更米等ニ而ハ余程之損ニハ相成間敷哉其米も定
而他國米交居候半旁益所ニハ有之間敷と被察候常平義へ年々過可申候
てハ不相成仕方勿論ニ候所奉行初扱候もの、心得ニ寄益ニも損ニも相
成候義申迄ハ無之候得共猶更申聞候當時有米五千余之所置方爲安心序
ニ承度候

付去年々粗三千之拂ハ例之酒屋拂ニ候哉當年杯ハ粗ハ見合件之五

千米の出候方ニハ如何

一 丹波の懸口之義ニ付答之趣等内密申聞之義委細承り家老共ハ今ニ申聞無之候得共何レ否居可申候各も不足米之爲ニハ時々難場を踏候得共毎度申聞ヲ守取計候段大悦ニ存候右掛口等之義不存居候ハ前年之如く兩てん棒ヲ被掛候様之事難計候間此上ともケ様之事ハ大小となく其時ニ内々申聞候様致度候

一 此節貯米貳千内外爲登取計候由是又承り候一昨年下ケ粃之内爲登残と有之上ハ敢る疑惑も不致候所一昨年ハ扶持方指支候強強願立相下候品今迄不残不引取置候懐合ニ候得ハ實ハ下粃ニ致候も間ニ合候事と相見候併是ハ各之扱ニハ無之候へ共件之下粃ハ其年之暮ニ返納いたし候様相覺丸々不請取前ニ返納置候と申ハ會計之扱巧拙如何と存候一乍序申聞候年々扶持米之過否豫相分居候半巨細ニハ不及候間已後年々見詰之置候節大數のみ内々爲見可申候

一 常平穀賣買共各へ爲任置候事故承り候迄ニハ無之候得共買入之時節又賣出候時節相庭之高下等心得ニも相成候間兩三度振ヲ溜置候而成共爲見候様致度候尤直ニ手元へ書出候とも又懸り參政將ハ金加役迄指出候ともとかく簡便之扱ニ手元へ廻候様扱可申候右

常平倉等之儀

御筆

寒中ハ雪も無之必ス當年も如何と存候故常平倉買穀之ギ先日も申聞候處其後買入之義不承候如何相成候哉何レ引上候とも下落ハ安心不致候藏奉行へも談申候て白井へも相談可致候依申聞候也

常平一條之品

泉 藏
七 兵 衛 へ

四三 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」嘉永六年二月二日

「癸丑二月二日着

煎茶器拜領ニ付

先便ハ母子ニ雪詠令感吟候其地ニて察候と相違如承知風當つよく雨戸を
閉置候仕合せ不風流無此上三日闇ニて日を暮し申候以來螢雪の修業杯申
事ハ相止晝寢ニても可致外無之覺候へき乍然雪止候頃ハ雨戸をも開き一
覽いたし申候返しニハ無之候へ共我等も發句いたし候

豊年の貢の雪や

まつの花

先便可申遣と存候處深夜故認落し頭取へ出し候跡ニて哥ニ事心付候故わ
ざく取戻し候も如何故今便ニ此段申遣候
扱又此菓子并ニ茶ハ母へ遣し可申このわたハ彪へ遣し申候
一盃かたむけ可然哉但し加藤ハ前車と存候何分過不申様可致候

此茶キビチヨへ多く入あつき湯をつぎさて茶へ湯を入其内へ前文キビチ
ヨの内ノ濃く出候茶をよき程ニつき候もよろし是ハ變格ニ

(たけきは、いぬ、つかはす)
ヤメト、イニス、マホ人ツ

但し是を直ニ火ニかけ候てハ危し茶を入置候て湯をつぐべし

又曰是ハ先年わさく申付候て拵させ候品ニ

追て申此度ハサヤ^{した(下カ)}へ遣し候茶ほうじ候ニ不及候右ニ義認落し候故序ニ咄
可申候
(このわたの外ハ不殘ヤメト母へ遣候事
ナヒハヤヒ外ハ不殘ヤメト母へ遣候事

四四 徳川齊昭書付 嘉永六年五月六日

徳川齊昭親書（嘉永六年五月）

癸丑五月六日

をかさけ

ふじたいけきえ
ハザヤヤメトヌ

教孝也 出遣し候故届可申候毎度 馬と天狗ハ扱悪く候我等居

候中ハ如此ニテもよろしく候へ共一通りの主にては面倒故幸と夫切ニ

致候半

一ルユ山云々

一タフトの義ニ付云々二日ニヒト、サテヤヌ申遣候下サキミヤヌ廻サ候

故是を見候事と文略致候

何レニも所々々の文通等にて朝食相濟机ニかゝり かゝりても手

廻り兼中々冊子杯見候間もなく小用ニ立候外不立 こまり申候机に

かゝりてのミ居候故左の方ハ兎角めぐり不宜右之方は筆を走らせ候故

左の様にハ無之候 もたまり不申候よい、杯の如く足ニても不

叶ニ不相成ハよろしくと心配致候八郎 鐵砲杯の世話ニ行候へハ

大ニ宜しく候へ共又明日ハ夫たけ事多くこまり申候在職中ハ一二度ニ

て相濟候事も今ハ十度廿度申ても届不申手数計かゝり申候品によりて

ハ左と存候義を先ツ右と申出し候て向より左ニ成來る様ニ致候様の事

ニて手数のミかゝり申候乍然以前を見候へハ筆ハ勞し候ても十二一二

ツ、ハ出來候だけかまだ取度 五月二日認

日々如此魚紙ニツ三ツ位ツ、費申候又よろしき義も 費し申候

ヤメトヌ

四五 徳川齊昭書付

嘉永六年七月廿七日

丑七月廿七日御下ケ

御封書

十八ノ條ニ

徳川齊昭親書 (嘉永六年七月)

唐國ニ相發候一揆當年ニ至り彌増ニ相成候ニ付エゲレス奉行并アメリカ
 のコミサーリスの者事柄を悟りサンハイ名地の方ニ立去り候右徒黨の者南
 京を一旦領し候へ共無是非次第有之再其地引拂ひ候當二月二十八日タン
 ガング名地ニおゐてエゲレス里數凡三十里南京の北地ニハゲテラール名官へ
 アングユング名人追不□□明去なから徒黨の者不意ニ發里候恐有之候又風説
 ニは徒黨の者再南京を領し候由ニ候

廿四ヶ條ニ

去子年十二月廿日フランス國都府にてフランス帝イスバニヤ國の候女と
 婚姻を結申候此候女ハ古き貴重の家柄ニ有之尤國家の續ニハ無之候右婚
 姻儀式の祝盛ニ取行申候

廿六ニ

一ドイツ國義ハ至極靜謐ニ有之候扱此國ハ北アメリカ洲ニ家移いたし候
 事年々ニ相増申候右様の義專有之候ハ人民次第ニ相増ドイツ國中に住

居候者手狭□□候様成行可申ニ付誠ニ幸の事ニ候

四十一ニ

アメリカ洲北方と南方續居候パナマ峽を切通しの儀ロンドンヌケレに於
 て一統評決云々

四十二ニ

北アメリカ共和政治の住人エリーソン名人先頃蒸氣具ニ甚肝要の事を發明
 いたし蒸氣具入用ニ水を用べきニ空氣を以て是ニ換へ候様の工夫致し運
 動力を得る迄是を熱め此發明の所是は通常之蒸氣具入用の薪炭用の物五
 分一を以て是ニ充て申候

四十三ニ

北アメリカ人別

年表

寛政二戊

ブランケンノ白額者三百十七万二千人
 フレイエコリエールリングデン^不□□□^明四千人
 スラーフエン^{奴隷ニ買}取候者六十九万七千人
 惣人数三百九十二万八千人

嘉永三戌

同上 千九百六十三万人
 同上 四十二万八千人
 同上 三百二十万四千人
 同上 二千三百廿六万二千人

エゲレス海軍

一 アリガトル 號舟 大サ五百トン^{但トシ}千六百斤
 一 ビクトルム 上同 同 四百八十トン

總て十八

フランス海軍

一 カボレシユーセ 號船 大砲四十四挺
 一 カスシナ 號船

ロシヤ

一 バルラス 號船 大砲五十四
 一 デフィナ 同 同 十挺
 一 ファストツク 同 同 四挺

北アメリカ

一 カプリセ 號船 二百六十四トン
 一 ミスシスシツベ 同 千七百トン

統七ツ

一當四月十七日唐國通船便の風説ニてハ唐國兩方へ相殘候アメリカ海軍

の内當四月四日日本へ差向候由ニ有之候但マガセイインシキツブ舟庫サ
 ッブレイ號舟は當時マカオに有之候アトフイースフアトイグ駆引通カ
 プリセ號舟は四月朔日ホンコンより退航いたしサラトガ號舟はマカオより
 出船いたし候風聞ニテハ右海軍日本へ着船いたし以前琉球へ相集候由
 ニ御座候

一和蘭海軍の内左ニ通咬啗吧へ備へ有之候
 統廿九艘

一昨年風説書ニ北アメリカ共和政治政館日本通商いたし度思念有之候處
 昨年八月十六日子ウヨルク名地のデヘラルト名記の中ニ右一件左ニ通記載
 有之候

一日本へ差向候一件發起彌打候募趣ワスシングトン名地より通達有之候右
 使節は蒸氣船ミスシスシツビ號舟船司ロング名人に有之但昨年九月廿日よ
 り廿九日迄に子ウヨルクより出船可致候ブリンセトン號舟船司ベルレイ名

はミスシスシツビ號舟に差添當時バルチモーン名地に滞船致しケートル名地
 船を取替へアルレグハン名地子イ號舟はカスポルト名地にて修理を加へ昨年
 十一月頃其地を出帆の積に候右船ニ出帆以前諸事成丈急速ニ用意いた
 し候但使節の司はベルレイ名人に有之昨年九月下旬日本海に趣キ候尤其
 以前日本海邊ニ有之候彼地海軍と出會の含ニ有之候右差向候は多分平
 和の趣意ニ可有之候測量の爲差向候者共ハ當時唐國海へ赴き候但是は
 船司ビンゴルト名人の指揮に有之右の外マルサル名地當時子ウヨルク名地ニ
 在て唐國へ赴候用意有之候昨年十月中旬の風説ニは左ニ船々日本へ向
 け出帆いたし候由有之候

一フエルモント <small>號舟</small>	大サ	三千トン	大砲	九十六挺	乗組	八百人
一蒸氣船	同	同	同	同	同	同
一ミスシスシツビ <small>號舟</small>	同	同	同	同	同	同
一シユスリハンナ <small>號舟</small>	同	同	同	同	同	同
同	同	二千五百トン	九挺	同	同	三百五十人

一	ボウハタン	上同	二千五百トン	同	二挺	同	二百七十人
一	サラトガ	上同		同	二十二挺	同	百九十人
一	アロガウチイ	上同	千トン	同	二挺		
一	フィンセニユース	上同		同	二十二挺	同	百九十人
一	ラーセー	上同		同	二十二挺	同	四百五十人
一	ホーボイセ	上同		同	十挺	同	百二十人
一	ソウダシブトン	上同		同	四挺		
一	フアロール	上同		同	四挺		
一	シントマレイス	上同		同	二十二挺		百九十人

右の内大軍船八艘其外小軍船惣大砲通計二百三十六挺乗組人数通計三千百二十五人有之候

一ロシヤ國海軍日本海へ赴候用意有之其船はフレカット軍船の一種のバルラス船一艘タランスポルトシキツプ軍送船一艘蒸氣船一艘にてフイーアドミ

ラール官名ブララーテン人名の指揮に有之候右趣意ハアメリカ海軍の様子を見候心得の様ニ有之候

一願にて是迄シリボンと申所ニ罷在候和蘭町醫イカフアンデンブルツク人名儀今度治療の爲出島在館ニ相決差遣し候

右之通御座候

かひたん
どんくるきゆる
しるす

四六 徳川齊昭書付

嘉永六年八月十五日

「癸丑八月満月之夕御下

御筆」

同心方目安へ入よしにて只今日付方受取申候但し中納言へ指出し開封の

上家老目付も一覽終り候上ニて我等へ指出し申候付番富田故先ッ其まゝ
 受取候へ共富田曰秘密と認有之候へ共格右様致候てハ以後の爲不宜候故尤是
様也目付ニて右様の扱ハ致申間敷誰ヲ指圖ニて我等名宛の書開封致し候
 哉聞度由申遣候中納言の名宛ニ候ハ、中納言見候上ニて我等へ廻し我等
 名宛ニ候ハ、我等見候上ニて中納言へ廻し候て宜しき譯のよし申遣候是
 も追々の上書の中へ入置可申尤一寸ハ見候へ共如何ニも見候品多く候故
 熟覽いたし用立可有之候ハ、可申聞候
 一 一橋ヲ小姓撰云々の義當中へ申聞候様に候へは原申合云々何も承り申
 候處手元ニ右書面無之若々昨夜遣候中へ入ハ致し不申候哉若々其方ニ
 有之候ハ、當中へ爲見候故可指出候

四七 徳川齊昭書付藤田東湖宛

嘉永六年八月カ

「嘉永癸丑 八月カ」

御筆 海防

一 昨日羽倉ヲ一橋浦賀之事申來候故直々申遣候處如此申來候右様取留も
 なき事申遣候ニ毎度内外共天下こまり申候いそがしき處扱ノこまり
 申候
 一 公邊御役々非常之節の立場并平日とも勤向の心得認出し候様老中ヲ申
 付候てハ如何左候ハ、自然と人々の持前之事ニ心付可申哉と存候既ニ
 今日勢州へ可申聞と存候處先ッ相談之上と存控へ申候否可申聞候
 一 此間中ヲ關白殿への書ノ事申聞候處今ニ不指出候處指支候ハ、我等ヲ
 可然可申遣候故可脱カ否聞申候
 一 此間勢州ヲ受取候毒煙と申つまらぬ法書若々下ケ候ハ、指出し可申

四八 徳川齊昭書付

嘉永六年九月十三日

「癸丑九月十三日夜御下」

徳川齊昭親書（嘉永六年九月）

御親書 海防

式部初の書付落手いたし候右儒者等の申出と海防懸りの申出と参考此間我等申聞候大意を以御答書ニツニも三ツニも取調可申候
一來春品物を持って今年の御答催促ニ來り候節の答振り

但し品物持來り候ても持不來候ても夫ニハかゝハリ不申も可然か又柔和ニ申かけ候か又剛強ニ申かけ候か不相分候へ共何レニ申かけ候とも御答ハ誠實を以て一樣ニて可然

品物持來り候とも右をうけ申候て此方品遣し候へハ則交易の姿ニ候へハ品物ハ不取遠海來り候故を以て何ぞ被下是ハ万次郎ニ聞候ハ、塗物か何か先ニて好尊ふ品可有之右等被遣可然

一琉球へ暎人を指置來年可來と申候て不來事有之候へハ來年不來候て一兩年も立來り候へは御代替り云々を申機會もおくれ候へハ又其時の答方迄も認置可然候統て過日も申候如く諸大名々の申出ハ多キ故一々に

取候事不相成候へ共海防懸り又ハ御儒者等を申上候中此方意ニ叶ひ申候ハ過日我等認爲見候如く誰々申上の中と云引言を記し可然認可然左も無之候てハ御かけニ致候せんも無之此度のミならず以後御かけニ致候ても御取用の廉見え候へハ格別骨折考候爲ニも可相成候依申聞候火中
尙々我等心付候義ハ愚考と註ニ認候て可然存候

七ツ半過歸宅只今食事相濟申候晝食ハ昨今なし下總一橋の書爲見申候一覽後返し可申候
下總ハ如何様難義と被察候四家共高ニ應し小祿程多く御金ニても不被下候ハ、とても持切レ申聞敷歟

四九 徳川齊昭書付「兩田宛」

嘉永六年九月十八日

書付之品

海防懸り

徳川齊昭親書 (嘉永六年九月)

百三十九

戸田 藤田へ

今日四ツ時頃が萬次郎出候筈ニ候へハ兩田ニても例を早く出候て可尋ケ
條申合候て尋一々彪ニて口書の様ニ話し可申出候迄待セ置候様ニ無之申
付置候て出候と申候ハ、直ニ 宮様御控所南椽へ呼候て兩田ハ御控所ニ
居り候て尋可申候後刻ニ我等も出候て聞度事ハ聞申候今日十日ノ間
公邊ニ御用無之候へハ日々呼候て尋候筈ニ老中へもかけ合老中が土佐守
へも達サセ此方をも申遣し候事ニ候

一 罪人吟味と違ひ全く咄しを承り申候事故右を合ニて咄合可申候必ベル
リ杯をも存居り候半故アメリカの書翰を一應見候て心付候義尋候ハ、
我等御答之工夫を考御一ツニも可相成と存候尙又アメリカオロシヤ等
にて日本の品ニて好候者ハ何ニ有之哉等の義も爲心得ニ聞可申候何も
柔ニ聞候方と存候

一 酒を好候哉否をも聞可申酒好ニ候ハ、吞セ候へハ格別口多く申間敷事

迄も申様ニ成者故是も第一ニアメリカの食物の咄等を何とななく聞可
申候

一 兩田半兵衛秘書懸り位ニて聞候心ニ有之候

右心得之爲申遣候故例を早く出候て可尋ケ條申合候様ニと存候

九月十八日

兩 田 へ

昨日佐々木の事一寸阿闍ニ如何成人かと聞候へハ氣六ヶ敷御役方へハ以
の外と申聞候先年御勘定奉行の節ハ水越さへも手ニ餘り候由我意のミツ
よく其上調違多く指支候由故夫切ニいたし申候

五〇 徳川齊昭書付「兩田宛」 嘉永六年九月廿三日

「御親書 癸丑九月念三朝」

徳川齊昭親書（嘉永六年九月）

書付

海防懸り

戸田の中へ
藤田

今日魯西亞和解一覽の處未懸りくへも爲見不申中故一覽候ハ、今日直ニかけ候由との事故無據其ま返し申候て不持歸候處其大意ハ日本の北魯西亞の南からふと島は何レの領地とも不相分尤魯西亞ハ土地廣大ニ候へハ別て土地好候ニハ不及候へ共人民共右土地領分ニ相成候へハ都合もよろしく日本魯西亞相接し居候近隣故互ニ睦く交易信通云々と申意味長たらしくくどく認候義ニて過日長崎奉行申出候アメリカニて日本を奪候心故身方ニ來り候杯申事ハ一ツも見え不申程ニ候尤見落しかハ難計候へ共先ツ無之様存候右ニて察候へハアメリカ浦賀へ來り書翰御取受ニ相成候故願濟候事と存來り申候間又ハ申合セ置候て來り申候間万次郎ニてハアメおろ懇意の程ニハ不申候へ共何共蟹の種類安心不致候先ツ今日

見申候大意申聞候何レ其中和解書も持歸り候事相成候ハ、持歸り相談も可致候へ共如何ニも一日を爭候様子故何とも難計先ツ大意のミ申聞候長崎江戶迄ハ道程も有之候故浦賀へ來り候へハ便利杯申事も見え候様子覺申候

九月念二

五一 徳川齊昭書付

嘉永六年十月廿日

癸丑十月廿日夜

御書 魯西亞へ御返翰之儀

おろしや御返翰之義本文ハ前田ニて認不分節の爲ニ古賀の漢文をも添遣候御義ハ阿牧初一同牧ハ俗文ニてハ論文の如く相成故和文可然と昨日ハ申候同道之扱筒川等ハ如何申出候か不相分候へとも今朝我等認爲見候趣ニておろしやの書翰へ引あて彪ニ和文ニて草稿認させ置可申候おろしやハ隣國の事故加むさつかへ常

住いたし又ハ千島と唱し候島々へも來り又ハカラフトの北邊へ來り漁事も致し候へ共隣國の親故見すえ候のみならず萬一爭論出來候節ハ不宜と日本人を不遣様致し置候へ共おろしやニても爭端を不好由此度申聞候上ハ以後は此方々も以前の如く漁事ニ差出候事も可有之不法の始末并國禁の通信交易さへ不致候へハカラフト島へ來り漁行致候とも見すミ居候へハ不惡致候様云々と申様ニ此度認遣し置候へハ又後世の證ニ相成可然と存候文章ニ至り候ては前田ニて直し可申候へハ我等々ハ俗文ニて認可申と存候右様申遣候へハ此度おろしやの來り候を幸と此方々千島もカラフトも此方地と申證を遣し候事ニ相成申候火中く

五二 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」推嘉永六年十月廿六日

十月廿六日夜御下ケ

御筆

書附
之品

海防懸り

藤田 彪へ

胡言胡服寸尺度量等の義ニ付御達書致熟覽候一體横文字の義は年來不好事ニて其まゝ被指置候へハ追々ハ三奉行方ニも横文字ニ達候人無之てハ不相成様可成行候へハ此度御達も出候ハ、右々趣ニいたし申度候

一追々蟹字學問弘り往々本朝の御爲ニ不相成候へハ通辭役之外御製禁ニ相成可然義ニ候へ共西洋の書中ニ有之義ニも日本の御國益ニ相成分も有之且是迄蟹文字學候ニも丹精致候へハ是迄相學候者之分ハ其まゝ御免被遊候條以來新に弟子取候事ハ致し申間敷是迄蘭學致候者ハ名前書出し置可申候

一西洋砲術等彼か發明する所を取て彼を防禦いたし候ハ御國益ニも相成候へ共胡言胡服を初寸尺度量ニ至り候迄も夷狄の唱を用候段ハ以の

外ニ候へハ以後 御國の言葉を用ひ寸尺等統て 御國の寸尺を唱へ可
申又和解書ニ認候も右ニ心得ニて夷狄の名地名等ハ格別統て 御國の
唱ニ認可申候

右萬石以上以下共ニ相達候條家來共ニ蘭學致候者の姓名認出し尙又
以後本文ニ通り扱可被申事
右ニ趣ニてハ如何

四家所がへの書付手元ニ無之候へハ尙又明日 登城前預のたんす中さが
し可申候十か十我等ハ返し候とハ覺候へ共閣老手元ニ無之との事故今一
應爲念見候て明朝否可申聞候

我等控ハ此冊へ認可申候依遣し申候
號令も先々今朝のニ相決大悦いたし候

五三 徳川齊昭書付(推)嘉永六年十月カ

兼々庵原ニて申聞ニ高橋ト誰とかの處ニ蝦夷ニ義委曲認候書有之候處高
橋駿河守方ハ先年燒失故誰とか有之を借候て爲見度存候處高橋と違ひ
懇意ニ無之先方ニても秘し置候へハ容易ニかし不申と申聞候故度々借出
し候様申付置候處于今届兼申候左候へハ平岩ガ申聞候ハ必右書と存候へ
ハ彪ニても馬ニて行右書をかり出申度候尙又兩田の中ニ候へハ平岩の人
物も分り可申候へハ旁兩人の中馬ニて成とも行候ハ、可然か平岩事も當
節何役ニか出度望も有之義と被察申候何も逢候て談候ハ、可相分と存候
蝦夷の書ハ不殘取入申度候依申聞候

魯西亞ニ儀ニ付

御屋形限見込申上候

書取

平 岩 右 近

此度魯齊亞長崎表の渡來ニ就るは蝦夷地の拘り候儀も多可有之哉ニ奉
 存候就るは舊記無之候るは當今切角之御見合ニ相成申間敷と奉推察候
 依る魯齊亞之儀ニ付蝦夷地の拘り候文化度之諸書物一纏ニ致其
 御屋形の差出度候間可然壹人私に御差添御請取奉願度候尤私方所持之
 品ニハ無之候得共御炎燒後
 上ニも御留御座候儀も難計旁々以世上ニも無之品柄ニ付差上度心底ニ
 御座候私儀は右御紹介申上候迄之儀ニ亦寸功も無之候得共此節埋候寶
 世ニ出候得は
 國家之御爲ニも相成且其仁之規模ニも相成候間右之儀は火急ニ何とか
 御内達被 仰渡候様可然奉存候以上

十月

平 井 右 近

五四 徳川齊昭書付

〔藤田東湖宛〕 嘉永六年十二月二十日

書附

藤田誠之進へ

一 御直々御申上云々ハ御扣之方可然事
 一 老中不出ハ不宜候故内々我等ハ可申遣置事
 一 萬々一御不尾^{首脱カ}ニ相成候とても御忠節ハ天下へ白明且御爲を被思召御申
 上ニ相成からハ御咎ハ覺^{悟脱}之前ニ候へ共今萬々一の事有之候てハ二度當
 尾州殿の如き御方を得候ハ六ヶ敷萬々一嚴重の御沙汰ニ相成り田安殿
 杯へ相談被仰付是迄當尾州殿御用の人不用様杯との事ニ相成候ハ、尾
 州殿御家の姦人ハ時を得たりと存尾州の御爲迄悪しく可相成左候時ハ
 二度天下の御爲をも被成兼候へハ時を御覽より外有之間敷かの事
 一 勢ハ不出人ニハ無之候へ共たとへ出候て伺候ても上田本丹等ニて不被
 用不被用ハ度々御催促ニ相成候へハ指支候て出兼候義ニ被察候へハ我
 等々云々申聞候ハ、出可申被存候事

一明朝嚴重御申遣候ハ御扣の方可然相成兼候ハ、理を以柔らかに御申遣の方可然か

一竹腰尾州殿へハ可然申老中へ出候てハ何程申上候ても御用無之杯申も難計却て御沙汰ニても出候様仕向候程も難計御用心有之事

一圓四郎以下朱書の事兩田を申聞候。公邊へも召出候上云々と有之故其通り申遣事

一おろしや和解の義ハ昨日夕迄ニハ出來候よし故定て明日ハ我等へ爲見候事と存候不見中ハ何事も申兼候

一おろしやを指出候書の事此間阿閣へ聞候へハ無之よし申聞候へき尙越中方ニ有之候ハ、明日阿閣へ咄し可申候扱夫ニ付一昨年ハ廣原所持のおろしや人於北地指出候書面もらひ置候へとも蟹文字ニて分り不申候へ共廣原へ聞候ハ、右書ハ何を認候のか可相分候故承り可申候

一坂本の兩冊ハ何レとくと一覽の上可返候中島の書ハ一寸一覽致候へ共

眼引張不足候故遣し候故兩田の中ニて一覽尤の義も有之候ハ、可申聞候書ハ例のたんすへ納置可申候

丑十二月廿日御下ケ

五五 徳川齊昭書付

藤田東湖宛（推）嘉永六年十二月以後

書附

誠之進へ

一此度筒井古賀林等魯西亞遣候書翰文認候ニ付被下物有之阿部家臣五一同斷右認候ニ付有之候處此方大筒獻上ニ付福地初へハ今以何被下も無之南部等ハ馬ヤ鷹を上候てさへ被下有之所福地杯ハ製造ニも立入骨折又此度獻上ニ付登セ候ニも大ニ骨折候處一切何も無之ハ如何尤右各人數出候ニ付御茶菓子ニて相濟候程の事故何被下無之候ても相當ニハ可有之候へ共五一杯へ被下有之上ハ黄金の一枚も被下有之可然様存候序ニ川路へ咄し見可申候

(註) 水戸藩の大砲(七十四門)献上は嘉永六年十二月十五日の事なり

五六 徳川齊昭書付「兩田宛」(推)嘉永六年十二月廿六日

書附之品

忠 大 夫
誠 之 進 へ

昨日長崎を飛脚ニても來り候歟ニて昨ハ老中退散も夜ニ入候との事久世
杯も六ツ半頃引候よし久世を出し候よしニて別紙寫近藤を昨夜出し候故
遣し申候何ぞ聞候事も有之候ハ、承り申度候今朝中納言ニて久世を呼ニ
遣し候よしニ候へ共未何等の咄も無之候故不相分候如何の事出來申候哉
兩田の中聞及も候ハ、可申聞候

御城付申出候書面之寫

松平讃岐守松平隠岐守松平越中守堀田備中守酒井雅樂頭へ

異國船浦賀表へ渡來致候ハ、早速人數出張可致旨御内意之趣

一 井伊掃部頭松平誠丸松平下總守松平肥後守右四家ハおろしや船長

崎表を浦賀沖へ相廻り候節ハ嚴重相固候様兼お相心得可申との趣

一 おろしや船再渡之儀至る穩之趣ニ相聞候所今日之風聞ニハ中々穩と

申場合ニも無之哉之由ニ御座候

一 大目付井戸石見守町奉行井戸對馬守御目付鶴殿民部少輔堀織部へ御

内意之趣

異國船浦賀表へ渡來候ハ、早速彼地へ出張可致候との趣

一 今日おろしや一條ニ付三奉行大目付海防懸り一同へ御逢有之右相濟

開ニ相成候由

但開ハ御人拂之事ニ

右條々全く坊主共之説ニて風聞ニ御座候へ共承り候處御承知迄ニ申
上候以上

德川齊昭親書 (嘉永六年十二月)

十二月廿六日

五七 德川齊昭書付 嘉永六年

癸丑 亞國使節へ御贈品目錄

御筆

覺

亞墨利加國(此所へ點を打主ノ字ニス)

梨子地蒔繪

料紙硯箱 一通

黑蠟色蒔繪

机 一脚

同

書棚 一

同

廣蓋 一組

蒔繪

花生 花臺共一

黑塗蒔繪

手焙 一對

置物 一

紅羽二重 十疋

白羽二重 十疋

紋縮緬 五疋

板縮緬 五疋

使節二

黑塗蒔繪

德川齊昭親書 (嘉永六年)

料紙硯箱 一通

紅羽二重 三疋

白羽二重 二疋

紋縮緬 二疋

板縮緬 三疋

船將始九人へ

紅白羽二重 三疋宛

板縮緬 二疋宛

通辯官へ

板縮緬 三疋

惣士官五十
六人程は

吸物椀 十人前宛

乗組惣中へ

米 貳百俵 五斗入

鶏 三百羽

右之通 御投惠ニト朱書ニス 被遣被下候様仕候事

覺

亞墨利加船今年寄共へ贈物仕候ハ、爲返物郡内縞十疋宛 指替と直ス 相贈候様可仕候事

五八 徳川齊昭書付 (推) 嘉永六年

一 蘭學者云々船砲水軍陸軍の書翻譯云々阿へ申達候

一 拜借金ハ直渡し之事

一 川路へ一橋家老の事申聞候

一 水越藏書之事ニ付此方の秘書内々半兵衛へ出右聞候へハ如別紙候是ハ

半兵衛疾々和解致し居候へハ出し候ニ不及と存候

一 おろしや云々兩冊子極密爲見申候我等も考候へ共尙又早々考可申候先
ツ今日ハ不取敢別紙之通り長崎へ申遣候

此書ハ明々後日遣し候故一方寫し本書ハ手元へ可出我等も此上考申
候

一 川路の母へ鳶の黒焼遣し候故届可申上於營中一寸咄し置申候火中

但し能粉ニして素湯ニて用ゆ若吞悪く候ハ、包候ても可然か

長崎奉行へ可相達趣

魯西亞船ハ先達ハ別段差出候横文字和解之趣ニハ書翰差立候日ハ四十
二日ニ返答可承旨申立候事ニ候得共既ニ此度去月廿日其地差立去ル十
五日夜江戸著ニ相成候儀ニ道中往來而已ニハも五六十日餘ハ相懸り候
間何と歎申遣候品ハ可有之候得共魯西亞人心得方とは齟齬致し候間右之
次第先厚く申諭置候様可被致候事

五九 徳川齊昭書付

嘉永六年

「前中納言様

○御筆」

去ル六月三日海防の義ニ付御用も被爲在候へハ暫の内登 城仕候様被
仰付實ニ以 御懇之御義難有仕合被奉存候然ル所其砌ハ御内實 御大故
ニ被爲在候へハ強て御辭退被申上候も被恐入無據御受被申上候處元ハ無
學不才且は退隱被 仰付候身分ニも被有之候へハ此度 御本丸へ御引移
も無御滞被爲濟恐悦御義被奉存候ニ付てハ暫の中登 城も仕候事故此上
何卒御免被奉願候故何分宜敷御扱ニ相成無滞御免被 仰出候様前中納言
殿被申候

六〇 徳川齊昭書付

嘉永年間

「嘉永頃

○御筆」

去ル天保辰の年異艦來りてより蠻夷來舶しけく加之天變地天擧て數へかたし不誠ハあるへからす不備ハ有へからす中古鎌倉將軍の時正嘉元年大地震ありてより飢饉疫病等數變天起りはてハ其虛ニ乗りて日蓮坊主杯安國論を作り最明寺入道を以時頼を欺き夫々して異端の邪説を弘むる至レ^{に脱}リ安國論中尤と聞ゆる事も間ニハあれともつらく考るニ天變地天ハ聖賢の世たり共此難事無事ハ不能され共聖主名將有之時は常に不慮の備をなし置か故ニ其難を防事出來ぬる事ニ日月の蝕を初安國論中ニ記ス處の難事數々あれ共何レも日月の蝕ハ勿論數日有事なく其他の難事とても聖主名將常ニ備手厚き時ハ凶作來りても人民飢死事もなく異艦襲來ル共何ぞ可恐哉然るに時頼愚昧ニして入道最明寺と共ニ日蓮を信したる事如何なり右日蓮坊主出て先ニ法然坊主出て法を弘めし害故ニかゝる變あれハ

とて法華といふ宗旨を作り出せり最明寺は神國に生れ出て入道せる程の愚昧なれば日蓮坊主に欺れたるもさる事なれ共時頼迄右を信したるハ如何にも愚ニて何様天變地天も可有之事ニ法然坊主か本朝ニ生れ出て淨土といふ宗を拵へて人民を欺き金銀を貪りしは可惡事なり又親鸞坊主ハ時の變に乗して一向宗といふを拵自分勝手の法を弘めたるを羨やミて又日蓮坊主も此變に乗して法然を惡口して法華宗といふ物を拵出たるハ何レも對本朝ての罪人といふへし安國論中に七難といへ共外々の難ハ日切月切年切ニて此日蓮坊出たる程も世の害に成事なし夫人民ハ我國の用にして四民共ニ夫々の職ありて皇國の助となるか故に一人たり共死る事をハ可惜事なり然るに凶作等の變に乗し幸と此坊主法華宗といふを拵へ有害無用の人民ふえたる事夥し右三宗ニてハ數百万之出家とても人なれハ草を食しても不居水計呑ても不居手足を不勞して剩人並より美味美食し上下の人を欺き金銀をかすめ取事のミを事とす聖主名將出給ふ世にハ必

かゝる有害無用の人民無之やう明政可行候事之天の禍ハ可去自ら爲せる
 禍ハ不可去とハ是之闇主愚將にて佛道を弘められ候害ハ此先聖主名將出
 られし世に無之ては改め難かるへし乍然いつ聖主名將出らるゝ事を不知
 ハ少々つゝも大和魂有らん者ハ右様有害無用の者減る様に仕向置て後日
 の聖主明將への忠と心かけへき事之そもく佛法にて尊ふ蓮華といふ物
 は泥中へ出て濁リニ染す美事成華咲ぬれば愚物へ出て發明なるを此華ニ
 譬へて人民を欺くに皆人其華ニのミ目が付て欺るゝハ愚なる事之其濁れ
 る泥をます物は蓮ニなしたる物ハなしされハ濁れるを惡むならハ蓮を引
 抜て泥をさらひ清めん事 神國の神慮ニ可叶様すへき事之
 濁リニハそますと見せて花蓮根ニハこひちをよせまさりつゝ
 濁リニハしますと見せて花蓮其根ハひちをみたす物から
 濁りにハそまぬ蓮と人ハいへと年ふるまゝニひぢまさりけり
 表ニハ夷の偽ニ枝葉を付て花とは見する共大和魂あらん人の目を見る時

は年々歳々泥をますハ此蓮なれハ人たらん者ハ異端邪説の僧侶の偽を信
 て神國の大恩を忘る間しき事之
 右ハ全く大道を記ス大極へ入可申候

六一 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」 嘉永年間

書附
 之品

誠之進へ

別紙米の事も此所へ認可申存候
 暎夷等と魯夷と中惡しきハ追々御承知ニ通り付てハ於海上暎佛杯と魯夷
 出會戦争いたし若フウチャン殺害も被致候へハ必カラフト等の事も先々
 延引可致候へハ此方ニても手廻り候ニよろしく候處萬々一魯夷長崎箱館
 ニて暎夷等と出會戦争ニ相成り魯夷ニて救ひくれ候様被頼候節魯夷を救
 候ハ、暎佛等ハ向ニ可相成左候とて救不申候ハ、以來魯夷敵ニ可相成援
 兵の御備も無之其場ニ臨口先ニて義理申候とて何共安心不致候尤先日長

崎嘆夷へ申諭候義ハ有之候へ共魯船を見かけ候ハ、下田とてもかまゐなく嘆船を寄候も難計一方魯船品川等へにハかニ乗入候ても援兵ハ勿論御固も無之候ハ、如何いたし候者か取越了簡ニハ候へ共ころハぬ先の杖夫々へ御かけにてハ如何

一 缺字の義更ニ不拘ハ格別又拘り候なれハ威義等缺字無之ハ如何やハリ
一字も缺字有之可有様致候故又々聞申上否早々可申聞候

六二 徳川齊昭書付〔阿部正弘宛〕 安政元年正月十八日

〔御封書入〕

昨年中々度々御返翰の義ハ催促申候へ共今ニ何御沙汰も無之候所御返翰ニ大意ハきたり居候へ共今般一ト先ツ應接の模様ニハ其上にて彌々様ときめ候積歟は一ツ又ハ去年中魯夷への御返翰諸向にて色々付札等いたし

最初の草稿大キニぬきさし出来大學頭等甚不平之由ニ承り候間此度ハ指かゝり候所にて諸向へハ見せばなし位にて決答ニ含歟是二ツ又ハやはりごた付居候歟是三ツと存候所たとへ拜見被 仰付候ても今日持參今晚中ニ決し明朝申上候様杯被 仰付候ても愚老如き無學無智にてハ迎も決兼候故右様指かゝり御かけニ御座候ハ、御免ニ致度候
一 魯夷へ御返翰ニ相成候文儀之内

不能取古例律今事

と申文儀ハ此方々證據を出し候姿の文句故相除候様去年十月歟建白致候處林家等にてやハリ其まゝ認候故果して魯夷第一ニ右文句をつらまへ川路等大ニ骨折候様子ニ相見申候序ニ此義も認候

正月十八日

勢州殿御初へ

水 隠 士

六三 徳川齊昭書付

安政元年正月廿一日

甲寅正月廿日廿一日

御書

過刻申付候寫出來候ハ、是と一同綴可申候是もとち方前後有之候故と
ち入候節直し可申候

一過刻咄可申と存失念致候處早半鐘と拍子木と代り候迄にてやハリ騒々
敷ハ同斷不宜よし今日も我等申聞候處老中初も同意ニハ候へ共如何ニ
も仕法ニ指支候よし火見櫓にて鼓打セ候がよろしくと申説も有り又詰
候御旗本等ハ屋敷ノニてから鐵炮を打候がよきと申説も有之との事
故鐵炮も大鼓も半鐘ニハ勝り勇氣ハ引立候へ共騒々しく候半又角板ニ
致候ても同斷故我等ハ不同心の由申聞候へは左候ハ、早く御旗本等へ
も通し候工夫考候て明日申聞候様ニとの事ニ候所如何致候ハ、御旗本
初へ直ニ通し候仕法て可有之哉我等も考候へ共尙又兩人の考明朝登

城迄ニ可申聞候明朝誠之進一寸出候やう可致候是又可申通候

一山國喜八郎義も浦賀邊海岸又ハ陣取候場杯可然所見覺候爲ニ出し候筈
相達申候へハ八郎供ニ出可申候故爲心得申聞候

尙々此一冊も誠之進方へ廻し同人寫候と一同とぢさせ可申候

御旗本等へ直ニ通達相成義山國杯心付ハ有之間敷哉大砲を打發候も騒敷
女子共道路ニさまよひ候義半鐘も甚しくハ有之間敷か何そよき心付も
有之哉承り可申聞候

過日遣候礮山文等も竝此文等も返し候ニ不及一覽の上用も無之候ハ、火
中可致又用ニ候ハ、ミヤニて秘し置候とも不苦候此度鈴木藤定府ニ相成
候よしニ聞候處右ハ礮山兄之有志の方へ引込置度事ニ

六四 徳川齊昭書付「阿部正弘宛」安政元年正月廿四日

原朱書
「昨夜認落候ヶ條」

一 漁船へ申付二三隻ツ、離レ不申様申合漁事爲致可然萬一異人船をよせ候節ハ漁人の事故可成丈にげ候不苦萬一近寄漁魚奪取候ハ、其儘ニ遣し但し此方ハハ扱又異人菓子様の物にても何ニても漁船へ入候ハ、一切受申間敷若々投込候て異船離レ候ハ、異船の方へ投かへし可申海へ落候ても不苦事但し歸船の上奉行所へ右ニ始末可申出候相見船の者名前も可申出候

右様有體申出候者へハ奪れ候たけのほう美奉行所を直ニ遣し可然

右ハ下々迄 脱アルカ 日本堅氣を異人ニ見セ候へハ是ニてハ如何程急々交易

ハ六ヶ敷と致させ候爲ニ

以下東湖筆草案
一 浦賀の事情更ニ分り不申候處同所奉行并ニ林等ハ人氣ニ拘り候ゆへ御

呼戻も如何ニ候へ共此度應接いたし候組頭并御徒目付與力位ハ御呼よせ別段之義を以各方を御直ニ御尋ニ相成候方可然長崎と違ひ御手近の事の舟に候ハ、速ニ往返可相成格別御評義の御足合ニ可相成哉と存候

一 追々金澤邊様子を見候者の咄承候に廿一日杯にハ異人測量之序ニ及ぼし島へ上陸かけくら杯いたし又ハ人家近へ行由彼邊の地勢本牧ハ却る金澤の方上陸亂妨等いたしやすき場所に候處小家の米倉一手にて左もあハれなる風情之由可然大名へ援兵被 仰付候ハ如何定る表向見分の役々を御承知とハ存候へ共心付ニまかせ申述候

一 細川等四家へハ持場等何の御達も無之哉外海持場受取以前異船渡來ニ付るは此上様子次第内外海之差別なく臨時出張可被 仰付旨改る御達有之方可然哉

但可相成ハ誰ハ金澤誰ハ某場所と申事御達之方可然候品川ハ芝迄ハ

徳川齊昭親書（安政元年正月）

百七十

何を申も御手近の御要害ゆへしかといたし候大名多き方可然候芝
邊遠淺ゆへ元船ハ不來候共へ共半故ばつていらハ來候間時宜ニ寄於此方
も万一の節ハ小船にてはつていらの夷人をねらひ打ニ儀相成様兼
る爲心得度候事

正月念四日

水隱士

勢州殿初へ

六五 徳川齊昭書付「藤田東湖宛」安政元年正月

書附之品

誠之進へ

如何ニも夷人剛情故浦賀奉行等申談本文ニ通ベルリ不快見舞として夥し
く遣候へハ悉く満悦いたし上官迄禮ニ出一艘引わけ浦賀へ入應接可致よ
し右の遣し物より悉く和らぎ候よし畜生同様ニ者ニ全く威ニておどし候
ハ、願可叶と存身命をおしミ彼も相成たけ戦争ハ不好なつけ候上ニて願

を可通心と見えたり

右ハ被下物の條へ書置可申

別紙手紙浦賀表に相詰居候御徒目付林久三郎申參候ニ付奉入
高覽候以上

正月

御目付共

浦賀與力之由

太田謙藏

謙藏 拜答

林久三郎様

應説趣意別事なし

贈物異人共悉喜悦是迄

一向出合不申候得共昨日ハ副將

徳川齊昭親書（安政元年正月）

百七十一

徳川齊昭親書（安政元年正月）

百七十二

爲挨拶出候よし承申候

貴墨拜讀昨日已上刻應説出張左ニ

與力 中島三郎助
 同 近藤良次
 組頭 黒川嘉兵衛
 御小人目附 壹人
 御徒目附 壹人
 〽 一艘乗込
 組頭 辻 茂右衛門
 與力 元木嶺助
 同心目附 土屋榮五郎
 〽 一艘乗込

午刻爲見届ノ追船出張

異船へ爲見舞贈物菜大根ねき鶏卵久年坊蜜柑右品々澤山ニ被遣候申下刻
二艘共歸岸

昨朝異船一艘小柴々出帆上總地ヨ走行品川沖へ乗込候様子相見候處申刻
此本牧鼻金川沖ヨ碇泊いたし居候よし見届之者承候へハ兼而被仰聞内事
取計可申候處昨日少々差支有之今明日中に應接出張之節ニ御同船取計可
申後刻迄答可申上候先御請艸々拜答

正月廿三日

六六 徳川齊昭書付

安政元年二月三日

「營中にて御矢立にて寫

被遊候分」

異船猶又相見候段届出候ニ付

申上候書付

徳川齊昭親書（安政元年二月）

百七十三